

# 王丸清勢

福岡県宗像市王丸所在遺跡の発掘調査報告

宗像市文化財調査報告書

第 33 集

1991

宗像市教育委員会

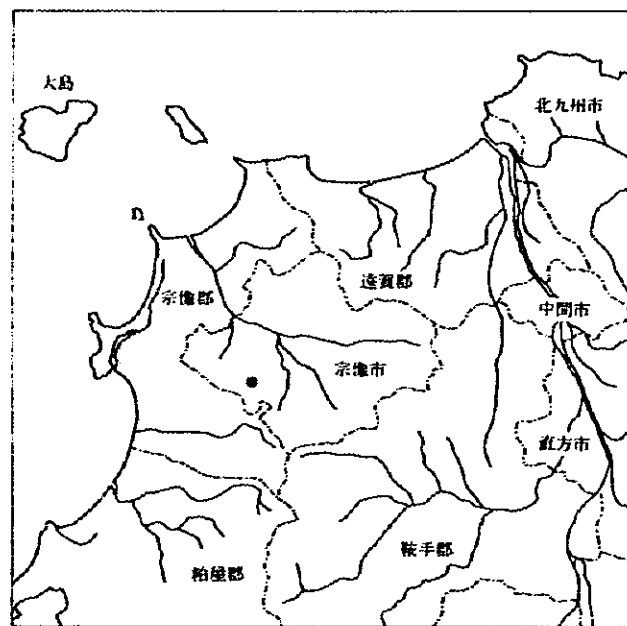


OMARUSUISEI  
王丸清勢

福岡県宗像市王丸所在遺跡の発掘調査報告

宗像市文化財調査報告書

第 33 集



1991

宗像市教育委員会

## 序 文

宗像市は福岡市・北九州市の中間に位置し、两大都市への通勤圏となっており、両政令都市の結節都市としての様相を濃くしています。

本市はこのような状況のなかで、「学術・文化都市」としての将来構想実現へ向けて着実に歩みを続けています。

宗像市の西部、宗像郡福間町に近く、市の二大団地の一つである日の里団地に南接して位置する王丸清勢遺跡は、団地の幹線道路と3号線を結ぶバイパス工事に先行して緊急発掘調査された遺跡です。

四半世紀を遡る日の里団地の造成時には200万㎡を越える工事でありながら、古墳時代の古墳は10基に満たず、宗像市域の歴史・地理的環境を考えると不可思議でありましたが、今回の調査および周辺の分布調査により、この地域の古墳時代後期の古墳群は団地より南の福間町との境にある、許斐山の北麓丘陵に分布することがわかりました。

今時調査では盗掘を受けながらも各種の遺構・遺物の出土により、5世紀末から6世紀後半にいたる墳墓が明らかになりましたが、部分的な調査に留まっており、遺跡の全体像については将来的な課題となりました。

本書が広く文化財の保護および学術研究の一資料として貢献することを念願するとともに、発掘調査に参加された方々の労苦と、ご協力いただいた関係者一同に対し、心から感謝の意を表する次第であります。

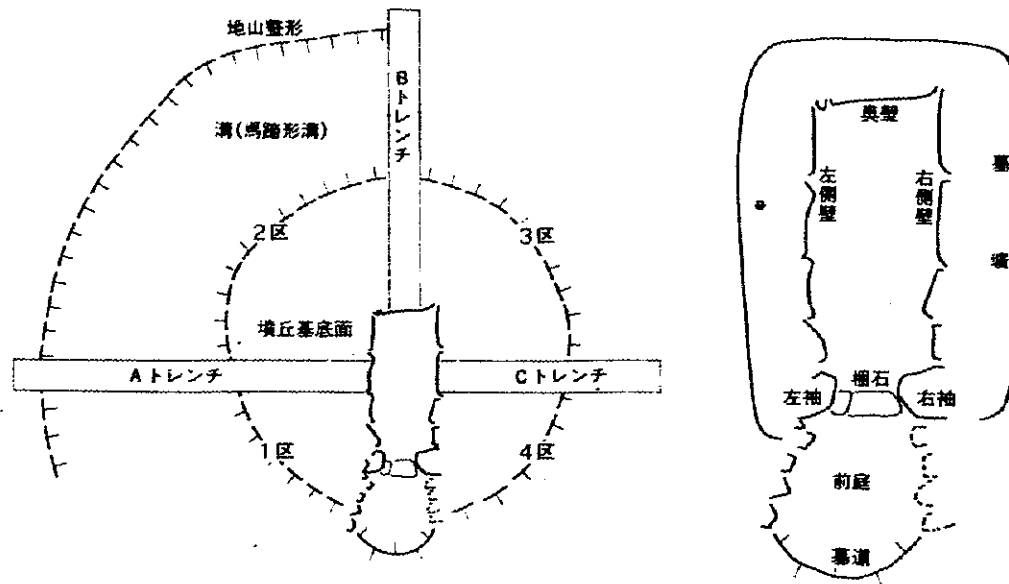
平成3年3月30日

宗像市教育委員会

教育長 森 下 照 清

## 例 言

1. 本書は、宗像市教育委員会が宗像市建設課から執行委任を受けた、東郷駅裏王丸線道路建設にかかる埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は宗像市教育委員会が事業主体となって行った。
3. 遺跡名は調査地の地番である宗像市大字王丸字清勢にちなんで王丸清勢（おうまるすいせい）遺跡と呼称する。
4. 遺構の実測・写真撮影は原俊一が行った。遺物のうち石器は杉山富雄氏が行い、他は原が行った。
5. 遺構・遺物の製図は広橋久美が、遺物の整理は法泉順子・高木成子・荒木由美子・橋本加代子が行った。
6. 本書の執筆は遺跡周辺の植生については梅田政良氏に、古墳の石室の石材については廣渡文利氏に玉稿をいただき、石器については杉山富雄が、他は原による。
7. 遺跡の測量にあたっては、国土調査法第II座標系を用いた。方位は磁針である。
8. 本書の編集は原が行った。



第1図 調査区および遺跡の名称

## 本文目次

	本文頁
第1章 はじめに .....	1
第2章 位置と環境 .....	3
第3章 発掘調査の記録 .....	13
1. S01 .....	13
2. S02 .....	22
3. S03 .....	26
4. S04 .....	30
5. S05 .....	32
6. S06 .....	33
7. その他 .....	34
第4章 まとめ .....	35
付編1 王丸清勢遺跡周辺の植生について .....	40
付編2 王丸清勢古墳の石室の石材について .....	41

## 図版目次

図版1	遺跡周辺の航空写真 (1/12,500) 昭和53年6月撮影
図版2	調査前全景 (西から) 調査後全景 (西から)
図版3	S01 調査前 (北から) S01 調査後全景 (西から)
図版4	S01 主体部玄門部 S01 主体部前庭左側石積み S01 主体部奥壁
図版5	S01 玄門部閉塞状況 S01の1・2区遺物出土状況 (北から) S01の1・2区遺物出土状況 (西から)
図版6	S02 調査前 (南から) S02 調査後全景 (西から)
図版7	S02 主体部 (西から) S02 主体部 (東から) S02 主体部遺物出土状況
図版8	S03 主体部 (西から) S03のAトレンチ西壁 S03のBトレンチ南壁
図版9	S04 主体部 (西から) S04 主体部奥壁 S04 主体部左側壁
図版10	S05 主体部 (西から) S06 主体部 (西から)
図版11	出土遺物
図版12	S01 主体部石材のサンプル

## 挿 図 目 次

	本文頁 例言
第1図 調査区及び遺構の名称 .....	例言
第2図 事業計画図 (1/2,000) .....	2
第3図 遺跡の範囲図 (1/2,500) .....	3
第4図 周辺の遺跡 (1/50,000) .....	5
第5図 現況地形測量図 (1/300) .....	14
第6図 遺構配置図 (1/300) .....	15
第7図 SO1 墳丘土層図 (1/60) .....	17
第8図 SO1 主体部実測図 (1/40) .....	18
第9図 SO1 主体部閉塞状況 (1/40) .....	19
第10図 SO1 遺物出土状況1 (1/200,1/40) .....	19
第11図 SO1 出土遺物実測図1 (1/3) .....	20
第12図 SO1 古墳出土遺物実測図2 (1/4) .....	21
第13図 SO1 出土遺物実測図3 (1/2) .....	21
第14図 SO2 主体部実測図 (1/40) .....	23
第15図 SO2 出土遺物実測図1 (1/4) .....	24
第16図 SO2 出土遺物実測図2 (1/2) .....	25
第17図 SO3 墳丘土層図 (1/60) .....	27
第18図 SO3 主体部実測図 (1/60) .....	28
第19図 SO3 出土遺物実測図 (1/3) .....	29
第20図 SO4 主体部実測図 (1/40) .....	30
第21図 SO5 主体部実測図 (1/30) .....	32
第22図 SO6 主体部実測図 (1/40) .....	33
第23図 石器実測図 (1/1) .....	34
第24図 主要古墳主体部一覧 (1/80) .....	35
第25図 SO1 壁体の構造 (1/60) .....	36
第26図 SO1 主体部の石材サンプル図 (1/60) .....	43
第27図 宗像市王丸周辺の地質図 (1971.松下による) (1/50,000) .....	45・46
第28図 宗像市周辺の地質図 (1990.富田・石橋による) .....	48

## 第1章 はじめに

### 調査に至る経過

1989年9月に宗像市建設産業部建設課から当教育委員会に対し、東郷駅裏王丸線道路建設にかかる宗像市大字王丸字清勢1043番地ほか3,668㎡について、埋蔵文化財の有無の照会があった。

事業地は福岡県発行（1977年）の福岡県遺跡等分布地図には記載はなかったが、同月現地踏査を行った結果、今回調査の丘陵稜線上に、10基を越す古墳が分布することがわかった。これら古墳群のうち、事業計画内に1基ないし2基の古墳がかかり、削平されることがあきらかとなったため、現状保存についての協議を重ねたが、最終的に宗像市建設課からの執行委任事業として緊急発掘調査を実施して記録保存の措置をとることとなった。

年度もせまった1990年3月12日に宗像市から文化財保護法第57条の3第1項により埋蔵文化財発掘の通知がなされ、同時に文化財保護法第98条の2第1項による埋蔵文化財発掘調査の通知を行って同年3月13日から調査に着手した。同3月31には第1次の調査を終え、同年4月6日から第2次の調査に入り、同6月27日に現地調査を終了した。

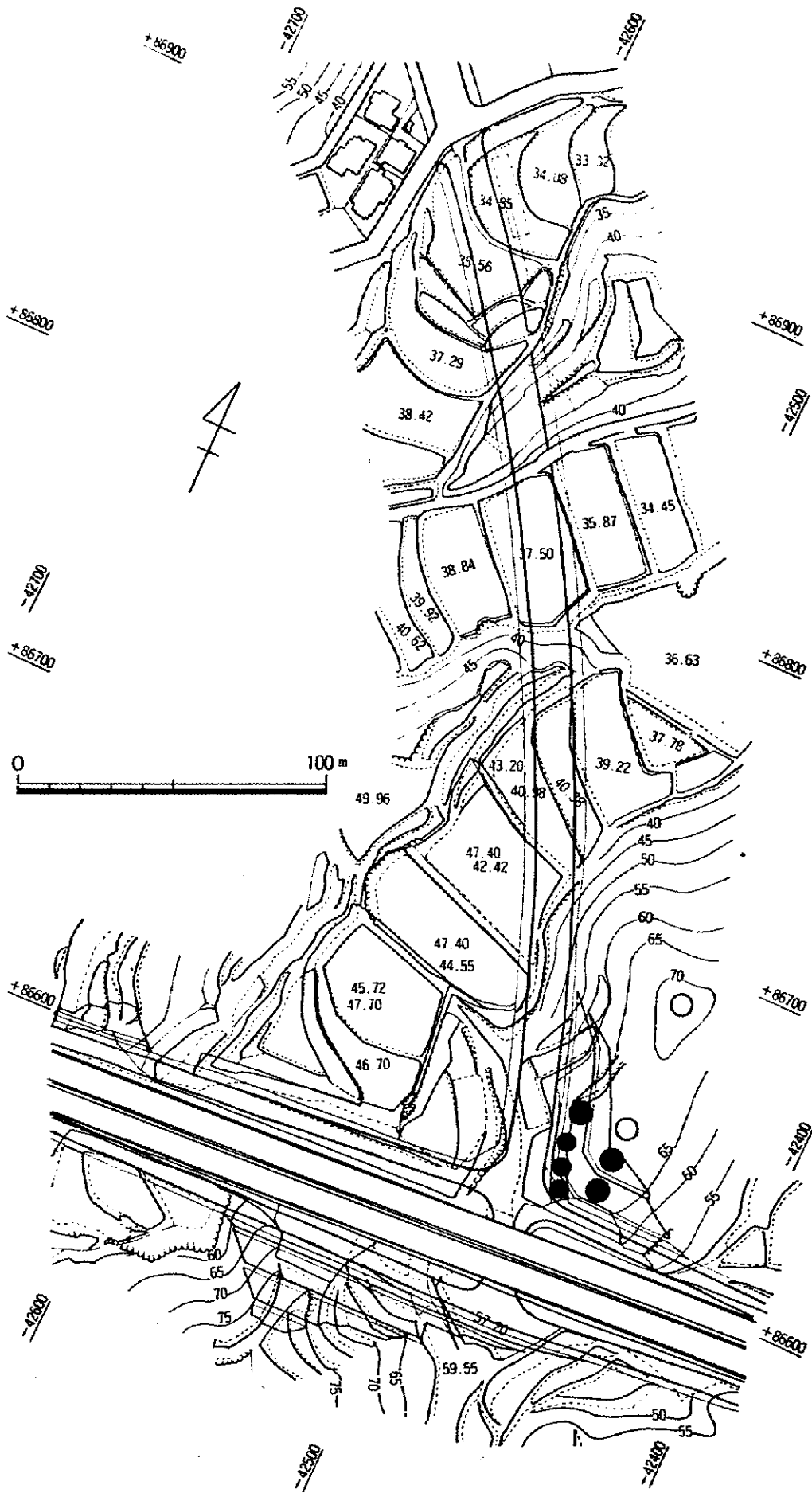
事業は次のとおりの組織で実施した。

総括	宗像市教育委員会	教育長	森下 照清
		教育部長	山田 政信
		社会教育課長	吉田 繁利
		文化係長	尾山 清
庶務・会計		主事	篠原 絹代（前任） 北野 隆文
発掘調査		主事	原 俊一
調査指導	東海大学	教授	佐田 茂
植生調査	宗像市文化財専門委員		梅田 政良
地質調査	北九州大学	教授	亀山 徳彦
石材調査	九州大学	名誉教授	廣渡 文利
	福岡教育大学	技官	高須 岩夫
石器	福岡市埋蔵文化財センター		杉山 富雄

発掘調査において、雪や寒風の中での調査に参加いただいた方々、また、調査全般にわたって協力いただいた宗像市建設課の職員に対し、心から謝意を申し上げます。







## 第2章 位置と環境

遺跡は、宗像郡福間町との境にある許斐山 (271 m) から北へ派生する丘陵上に位置する。この丘陵地帯は、地質的には北崎花崗閃緑岩が占める。遺跡の主体は古墳で、14基が南北に細く延びる丘陵稜線上および西斜面に分布する。各遺構は斜面の標高62mから丘陵稜線上の標高69mの間に占地している。

遺跡の所在は宗像市大字王丸 (字清勢) 1041の2、4、1043の1-4、1052番地にある。

今回の調査は1041の2、4、1043の2-4番地に分布がある6基の古墳が対象となった。

遺跡周辺の地形は深い谷地が深く入りこんでおり、この細い谷あいごとに、小区画の水田が営まれている。遺跡以外の枝丘陵上にも古墳群の形成が認められる。所在地と概要は次のとおりである。



王丸清勢遺跡

- 王丸船差遺跡(第3図1) 3基以上からなる古墳群 大字王丸1124の1、3番地所在
- 王丸長谷遺跡(第3図2) 5基以上からなる古墳群 大字王丸1162の2、1135、1153、1156の1～3、1158の2、4、1151の1番地所在。
- 王丸高熊遺跡(第3図3) 3基以上からなる古墳群 大字王丸1191、1186の1、1184番地所在。
- 王丸清勢遺跡(第3図4) 5基以上からなる古墳群 大字王丸1013、1017の1、1015番地所在。
- 王丸長原遺跡(第3図5) 2基以上からなる古墳群 大字王丸998、999の2、1000番地所在。

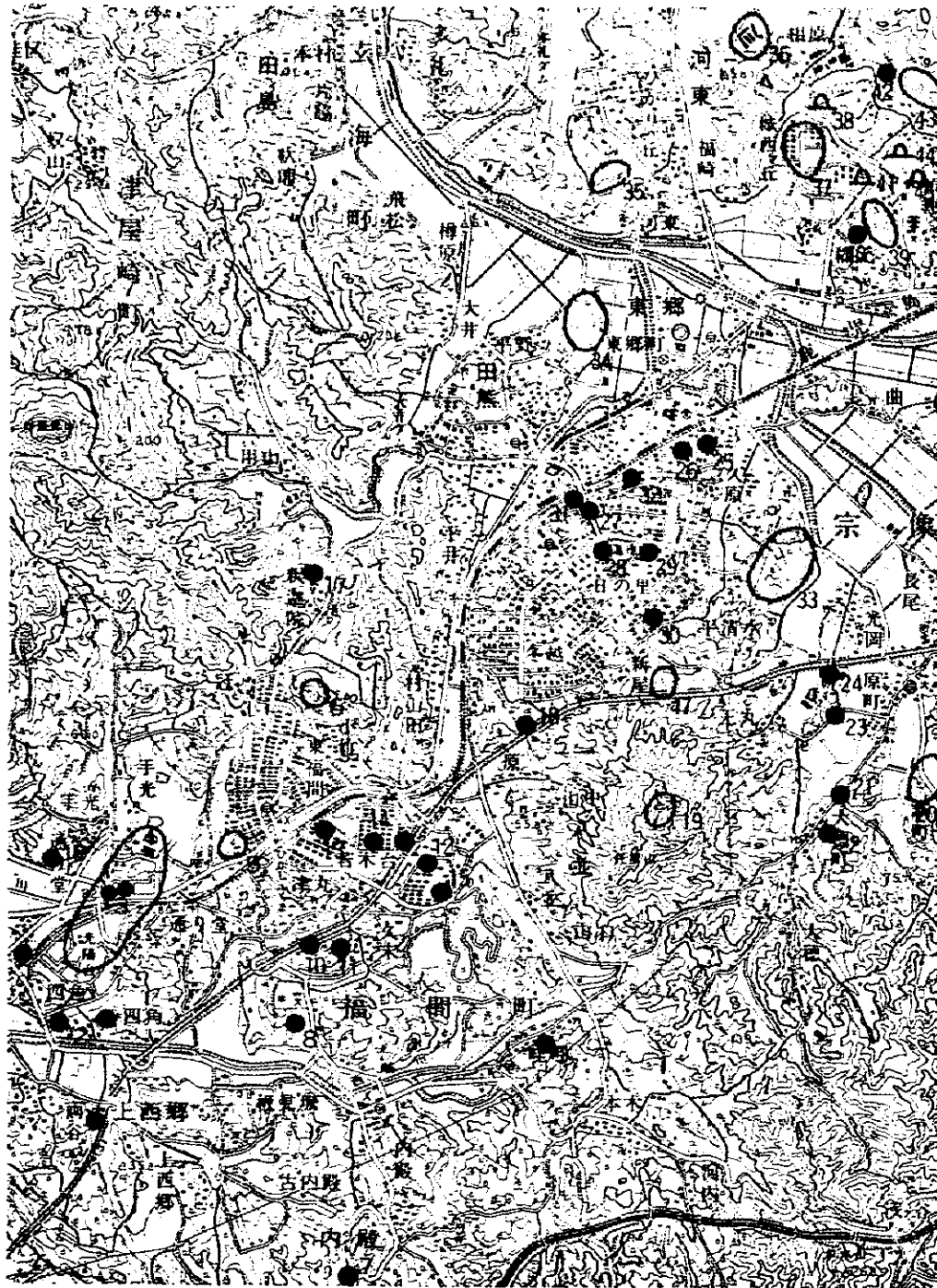
いずれの遺跡も南北に細長く延びる丘陵稜線上に分布があり、本遺跡と同時期の横穴式石室を内部主体とする古墳群であろう。

本遺跡の背後にある許斐山は、平安～戦国期の許斐山城(第4図19)のあったところで、大治年間に宗像大宮司氏平が創築した。この城は天正11年に大友宗麟の部将立花道雪、高橋紹運が攻略し、立花氏の持城となった。天正15年には豊臣秀吉の九州出兵ののちに壊された。

宗像市の西部から福岡町の東部域は、ここ20数年間の大型宅地造成や国道バイパス工事などに伴って、数多くの遺跡が破壊、消滅の被害を受けている。かろうじて消滅をさけて調査できた遺跡、遺構を一覧表により示しておきたい。

表1 周辺の遺跡一覧(番号は第4図の位置番号と同じである)

番号	遺跡(遺構)名	所在地	遺構の概要	出土遺物	時期	文献
1	福正寺古墳	宗像郡福岡町大字福正寺1857	円墳、横穴式石室	勾玉5、玉環4、切子玉1、管玉2、方柱形ガラス玉1、丸玉82、耳環7、刀子1、鉄鏝6	6C中	1
2	龜山古墳	宗像郡福岡町2885	前方後円墳、主体部不明	全長(28m)、後円部径21m、同高5m	7C	
3	手光波切不動古墳	宗像郡福岡町大字手光1135の1	円墳、横穴式石室		7C	2
4	手光古墳群	宗像郡福岡町大字福岡字西ノ裏	南1号墳、箱式石棺	鉄剣	5C	1
		宗像郡福岡町大字福岡字西ノ裏	南2号墳、複室横穴式石室	須恵器、土師器、鉄刀、鉄子、石突形鉄器、鉄鏝、管、鉄具、帯金具、辻金具、刀子、鉄斧、羽子板形鉄器、タケ木杖鉄器、蛇行鉄器、耳環	6C後半	1
		宗像郡福岡町大字手光字大入	南3号墳、複室横穴式石室	須恵器、土師器、刀子、耳環、切小玉、丸玉	6C末	
		宗像郡福岡町大字手光字大入	南4号墳、複室横穴式石室	土師器、鉄刀、鉄子、鉄鏝	6C後半～末	
		宗像郡福岡町大字手光字大入	南5号墳、単室横穴式石室	須恵器、土師器、丹生土器、鉄鏝、刀子、ガラス玉、青銅片	6C中頃	
		宗像郡福岡町大字手光字大入	南6号墳、単室横穴式石室	須恵器、鉄器片	6C前半	
		宗像郡福岡町大字手光字大入	南7号墳、石棺形横穴式石室	須恵器、刀子、鉄鏝	5C末	
		宗像郡福岡町大字手光字大入	南8号墳、石棺形横穴式石室	須恵器、刀子、鉄鏝	5C末	
		宗像郡福岡町大字手光字通田	北1号墳、単室横穴式石室	須恵器、土師器、白磁、鉄刀、鉄鏝、刀子、管、ガラス玉	6C前半	
		宗像郡福岡町大字手光字真ノ谷	北2号墳、複室横穴式石室	須恵器、土師器、玉環、辻金具、鉄具、鉄斧、刀子、たがね状鉄器、鉄子、鉄刀、ガラス玉、水晶切小玉、耳環	6C後半	
			付属石室上端墓			
		宗像郡福岡町大字手光字真ノ谷・牟項	北2号墳、横穴式石室	管、管、鉄鏝、鉄斧、刀子、鉄鏝、鉄剣、鉄刀	5C前半	



第4図 周辺の遺跡(1/50,000)

王丸清勢遺跡

No.	遺跡(遺構)名	所在地	遺構の概要	出土遺物	時期	文献
		宗像郡福岡町大字 手光字裏ノ谷・赤塚	北2号墳、竪穴式石室	中世土師器	5C前半	
		宗像郡福岡町大字 手光字裏ノ谷・赤塚	北2号墳、石槨系竪穴式石室	刀子	5C前半	
5	津丸高平遺跡	宗像郡福岡町大字 津丸1179の2	古墳3、経塚	銅製経筒	6-12C	3
6	小竹古墳	宗像郡福岡町小竹64の2	円墳、横穴式石室		7C	
7	貝の塚古墳	宗像郡福岡町大字 上西郷2072の2	円墳、横穴式石室		6C	
8	神興地寺	宗像郡福岡町大字 津丸字元神興646の1	寺院跡	薄輪式古瓦、越州窯系青磁、龍泉窯系青磁	8-12C	4
9	畦町遺跡	宗像郡福岡町字畦町		薄輪式古瓦	8-9C	5
10	津丸五郎丸遺跡	宗像郡福岡町大字 津丸字五郎丸	包含層	須恵器、土師器、越州窯系青磁、古瓦、滑石石鏡、滑石子持身玉、磁石銅鏝、鉄刀、鉄釘	6-10C	6
11	久末大塚古墳	宗像郡福岡町大字久末	円墳			6
12	長尾古墳群	宗像郡福岡町大字 津丸字長尾1427	1号墳、横穴式石室	須恵器、土師器、鉄鏡、刀子	6C後半	6
		宗像郡福岡町大字 津丸字長尾1432	2号墳、単室横穴式石室	須恵器、土師器、鉄鏡、刀子、鉄製石突き、鉄刀、馬鈴、土倉瓦、鍬具、埋金具、耳環、身玉、小玉、土玉、石製小玉、ガラス玉	6C中頃	7
13	野間尻古墳群	宗像郡福岡町大字 津丸字田1339	1号墳、横穴式石室	刀子	5C	
		宗像郡福岡町大字 津丸字野間尻1297	2号墳、不明			
		宗像郡福岡町大字 津丸字野間尻1299	3号墳、不明			
		宗像郡福岡町大字 津丸字野間尻1298	4号墳円墳、不明			
		宗像郡福岡町大字 津丸字田1311	5号墳円墳、不明			
		宗像郡福岡町大字 津丸字野間尻1301	6号墳円墳、横穴式石室	刀子	5C	
		宗像郡福岡町大字 津丸字田1248	7号墳円墳、不明			
		宗像郡福岡町大字津丸字 田1347-2551字野間尻1292	包含層	須恵器、土師器、龍泉窯系青磁	6-12C	
14	長林古墳群	宗像郡福岡町大字 津丸字長林1045	1号墳、横穴式石室	土師器	5C	
		宗像郡福岡町大字 津丸字長林1404	2号墳、不明			
14	赤ハゲ遺跡	宗像郡福岡町大字 久末字赤ハゲ9	円墳か?	須恵器		
15	飛塚古墳群	宗像郡福岡町大字 久末字飛塚29	1号墳、単室横穴式石室	須恵器、土師器、鉄鏡、鉄刀、刀子、鉄製石突き、ガラス小玉、土製小玉、石製小玉、鉄製小玉、メノウ小玉	6C後半	
		宗像郡福岡町大字 久末字飛塚29	2号墳、単室横穴式石室	耳環	6C後半	
		宗像郡福岡町大字 久末字飛塚30	3号墳、不明			
		宗像郡福岡町大字 久末字飛塚30	4号墳、不明			
		宗像郡福岡町大字 久末字飛塚33	5号墳、不明			
		宗像郡福岡町大字 久末字飛塚35	6号墳、不明			
		宗像郡福岡町大字 久末字飛塚34	7号墳、不明			
		宗像郡福岡町大字 久末字飛塚34	8号墳、不明			
		宗像郡福岡町大字 久末字飛塚34	9号墳、不明			

王丸清勢遺跡

№	遺跡(遺構)名	所在地	遺構の概要	出土遺物	時期	文献	
16	下光長塚 遺跡	宗像郡福岡町大字 下光長塚2304	古墳、組合せ式箱式石棺	埴	4-5C	8	
			中伏集石遺構	五輪塔、大尊尊、土師器、陶器、瓦瓦	14C前半		
17	大井大塚歌 遺跡	宗像市大字大井1489-1	住居跡	土師器、青磁	12C		
18	村山田高江 遺跡	宗像市大字村山田字高江	1号墳、横穴式石室	銅鏡、耳環、鉄鏃、鉄刀、刀子	6C		
		宗像市大字村山田字高江	1号墳、横穴式石室	耳環、土製丸玉、鉄鏃、鉄刀	6C		
		宗像市大字村山田字高江	1号墳、横穴式石室	須恵器、土師器、鉄鏃、刀子			
19	許斐山城	宗像市大字王丸	中世山城		16C	10	
20	野坂一町岡 遺跡	宗像市大字野坂字一町岡	住居跡9、竪立柱建物1	弥生土器、須恵器、土師器、甕、鉄鏃、鉄鏃車、投弾、土製横道輪、石鏃 行包丁、石斧、砥石	弥生 4-6C	9	
21	大塚町原 遺跡	宗像市大字大塚町	古墳3、竪立柱建物	須恵器、土師器、鉄製釣針、馬鈴、金銅冠?、土城大刀、雲珠、杏葉 鉄鏃、刀子、勾玉、耳環、玉	6C~		
22	大塚町町口 遺跡	宗像市大字大塚町	古墳5	須恵器、土師器、馬鈴、鉄刀、鉄鏃、刀子、勾玉、耳環、玉、骨、鉄斧	6C 中-後半	11	
23	E丸河原 遺跡	宗像市大字王丸	住居跡10	須恵器、土師器、滑石製有孔円盤、滑石製白玉	古墳期 6C	9	
24	光岡草場 遺跡	宗像市大字光岡	古墳、土壇墓24	弥生土器、鉄刀、鉄鏃	弥生中期 古墳	12	
25	東郷登り立 遺跡	宗像市大字東郷634、635 637-640、645ほか	住居跡、石墓土壇墓	弥生土器	弥生後期	13	
26	東郷3号墳	宗像市大字東郷709	円墳、現状保存				
		東郷高塚 遺跡	宗像市大字東郷701、702 703ほか	前方後円墳、粘土埴	土師器、勾玉、管玉、鉄鏃、鉄刀、鉄子		14
			筒状墓穴、円形墓穴	弥生土器、石包丁	弥生前期		
			大塚土壇、後円部溝内3墓		中世		
		東郷5号墳	宗像市大字東郷699	円墳、現状保存		13	
		東郷6号墳	宗像市大字東郷703	円墳、横穴式石室	龍泉宮系青磁、土師器	6C	
		東郷6号墳 上部溝	宗像市大字東郷703	断面U字形溝	弥生後期土器		
27	スベツトウ 古墳	宗像市大字田熊字 中尾640ほか	前方後円墳、横穴式石室	須恵器、土師器、弥生土器、桂甲、鉄具、刀子、鉄鏃、冠、ガラス玉、土鏃	6C前半		
28	東郷2号墳	宗像市大字田熊字 島野4322	円墳、横穴式石室	須恵器、鉄刀			
29	東郷7号墳	宗像市大字田熊字 黒田155-2	円墳、箱式石棺?				
30	東郷8号墳	宗像市大字田熊字 五行226-212ほか	円墳、横穴式石室				
31	田熊中尾 遺跡	宗像市大字田熊字中尾648	包含層	弥生土器	弥生 前-中		
32	田熊上ノ畑 遺跡	宗像市大字田熊字 上ノ畑409-411	住居跡、包含層、大塚土壇	高麗青磁、弥生土器、土製品	弥生 中ほか		
33	久塚遺跡	宗像市大字久塚141ほか	土壇墓41、貯蔵穴18 製格墓5	弥生土器、石包丁、銅劍、銅矛、石劍、石鏃	弥生 前-中	15	
			古墳50、石棺墓3 石墓土壇墓4、住居跡1	須恵器、土師器、鏡、甕、馬鈴、辻金具、鉄斧、鉄刀、雲珠、鉄鏃、勾玉 管玉ほか	4-7C		
			土壇墓3、竪立柱建物1、大溝	土師器、瓦器、石鏃、陶磁器、埴	12-13C	15	
34	大井三倉 遺跡	宗像市大字大井	円形住居跡2、貯蔵穴3	弥生土器	弥生中期	16	
			溝、断面V字形	弥生土器、石劍、石鏃、土鏃、鉄鏃車、石包丁、石斧	弥生前期	16	
			1号墳、円墳、横穴式石室	須恵器、鉄刀、鉄鏃、玉	6C中	16	

王丸清勢遺跡

区画	遺跡(遺構)名	所在地	遺構の概要	出土遺物	時期	文献
			2号墳、円墳、横穴式石室	須恵器、土師器、鉄刀、鉄鏃、馬銜、鏃、耳環、勾玉、黄玉、切小玉、ガラス玉ほか	6C中	
			3号墳、円墳、横穴式石室	須恵器、鉄刀、鉄鏃、刀子、鏃、耳環、黄玉、ガラス玉、管玉、白玉	6C末	
			4号墳、円墳、横穴式石室	須恵器、土師器、鉄刀、鉄鏃、鏃、辻金具、刀子、鉄斧、勾玉、ガラス玉、上製玉	6C後半	
			5号墳、円墳、横穴式石室	須恵器、鉄刀、鉄鏃、蛇行鉄器、鉄斧、鏃、黄玉、ガラス玉、上製玉、空玉	6C末	
			6号墳、円墳、横穴式石室	須恵器、鉄刀、鉄鏃、上製玉		
			7号墳、円墳、横穴式石室	須恵器、耳環	6C中	
			8号墳、円墳、横穴式石室	須恵器、土師器、鉄刀、鉄鏃、鏃、上製玉		
			小石室2、土壇墓5、石室土壇墓2、石棺墓2、横穴墓、土壇	須恵器、土師器、馬具、鉄斧		
			住居跡11、方形住居	土師器	5-6C	
			中世墓	龍泉宮系青磁	12C	16
35	久戸古墳群	宗像市大字河東162913か	1号墳、横穴式石室	須恵器、鉄鏃	5C後半	17a
			2号墳、横穴式石室	陶質土器、鉄鏃、鉄刀	5C後半	
			3号墳、横穴、墳丘有	須恵器、鉄刀	6C初頭	
			4号墳、箱式石棺墓	須恵器	4C末	
			5号墳、土壇墓石室	刀子	6C中頃	
			6号墳、箱式石棺	土師器、鉄刀、三角板革製短甲	4C末-5C前半	
			7号墳、割竹形木棺直葬	須恵器	6C前半	
			8号墳、横穴、墳丘有	須恵器、耳環	5C後半	
			9号墳、箱式木棺か石棺	鉄鏃、三重環頭鉄刀	5C中頃	
			10号墳、横穴式石室	須恵器、刀子	6C初頭	
			11号墳、横穴式石室	須恵器、ガラス玉	6C初頭	
			12号墳、箱式石棺	須恵器	5C後半	
			13号墳、横穴、墳丘有	須恵器、鉄鏃、耳環、上製玉	6C初頭	
			1号小石室	鉄鏃、鉄刀		
			2号小石室			
			1号墳、横穴式石室	須恵器、鉄鏃	5C後半	
			箱式石棺墓	鉄鏃		
			石室土壇墓			
			14号墳、横穴式石室		7C前半	17b
			15号墳、複室横穴式石室	須恵器	7C前半	
			16号墳、横穴式石室	須恵器、新羅車	7C前半	
			17号墳、複室横穴式石室	須恵器、鉄刀	7C前半	

王丸清勢遺跡

群	遺跡(遺構)名	所在地	遺構の概要	出土遺物	時期	文献
			18号墳、横穴式石室	土師器、耳環	7C前半	
			19号墳、複室横穴式石室	須恵器、土師器、主頭鉄刀	7C前半	
			20号墳、横穴式石室	須恵器	7C前半	
			1号横穴		7C中頃	
			2号横穴	須恵器	7C中頃	
			3号横穴	須恵器、土師器、鉄鏃、刀子	7C中頃	
			4号横穴	須恵器、鉄鏃	7C中頃	
			5号横穴、埋葬主体2	須恵器、土師器、紡錘車	7C中頃	
			6号横穴、埋葬主体2	耳環	7C中頃	
			7号横穴	須恵器	7C中頃	
			8号横穴	須恵器	7C中頃	
			9号横穴		7C中頃	
			10号横穴		7C中頃	
			11号横穴		7C中頃	
			12号横穴		7C中頃	
			13号横穴		7C中頃	
			14号横穴		7C中頃	
			15号横穴	須恵器、鉄鏃	7C中頃	
			16号横穴		7C中頃	
			17号横穴	須恵器、土師器	7C中頃	
36	相原古墳群	宗像市大字河東	1号墳、横穴式石室	須恵器、耳環	6C前半	18 a
			2号墳、複室横穴式石室	須恵器、新羅土器、鉄刀、鉄鏃、裏玉、ガラス玉、空玉	7C初頃	
			3号墳、横穴式石室	須恵器、鉄刀	7C初頃～	
			4号墳、横穴式石室	須恵器、耳環、ガラス玉、土製品、勾玉、管玉、切子玉	6C前半	
			5号墳、横穴式石室		6C前半	
			6号墳、横穴式石室		5C末～ 6C初頃	
			7号墳、横穴式石室		5C末～ 6C初頃	
			8号墳、横穴式石室		5C末～ 6C初頃	
			9号墳、横穴式石室		5C末～ 6C初頃	
			11号墳、横穴式石室	鉄鏃	5C末～ 6C初頃	
			12号墳、複室横穴式石室	須恵器	6C末	
			13号墳、横穴式石室	須恵器、裏玉、ガラス玉	7C中頃	



王丸清勢遺跡

群	遺跡(遺構)名	所在地	遺構の概要	出土遺物	時期	文献
			14号墳、横穴式石室	須恵器、耳環	7C	
			15号墳、横穴式石室	須恵器、土師器、管、鉄錐	7C	
			16号墳、横穴式石室	須恵器、土師器	7C	
			17号墳、横穴式石室	須恵器	7C前半	
			18号墳、横穴式石室	須恵器	7C初葉	
			19号墳、横穴式石室	須恵器	7C初葉	
			20号墳、横穴式石室	須恵器、土師器	6C後半	
			21号墳、横穴式石室	須恵器	6C後半	
			22号墳、横穴式石室	須恵器、土師器、鉄片、鏡、磁石	7C前半	
			23号墳、横穴式石室	須恵器、ガラス玉、瑪瑙玉	6C末	
	一部調査		E-1号墳、前方後円墳 横穴式石室	須恵器、土師器、桂甲、刀子、鉄刀、鉄錐、管、雲珠、鉄片、瑪瑙玉 ガラス玉	6C後半	18b
	未調査破壊		E-2号墳			
	未調査破壊		E-3号墳			
	未調査破壊		E-4号墳			
	未調査破壊		E-5号墳			
	未調査破壊		E-7号墳			
	未調査破壊		E-8号墳、円墳、横穴式石室	須恵器、鉄錐、鉄刀		
	未調査破壊		E-9号墳、円墳			
	未調査破壊		E-10号墳、横穴式石室			
	未調査破壊		E-11号墳、横穴式石室			
	未調査破壊		E-12号墳、円墳			
	未調査破壊		E-13号墳、円墳			
	未調査破壊		E-14号墳、円墳			
37	福元古墳群	宗埴市大字福元字 小裏1350ほか	1-1号墳、横穴式石室	刀子、鉄錐、鏡	5C後半	19a
			1-2号墳、横穴式石室	土師器	5C後半	
			1-3号墳、横穴式石室	須恵器	5C末	
			1-4号墳、横穴式石室	須恵器、土師器	5C末	
			1-5号墳、横穴式石室		5C後半	
			1-6号墳、土壇墓2、石室 土壇墓、小形横穴式石室		弥生終末 -古墳	
			2-1号墳、横穴式石室	鉄刀、土製土、須恵器	6C	19b
			2-2号墳、横穴式石室	鉄錐	6C	
			2-3号墳、横穴式石室	鉄錐	5C-6C	

王丸清勢遺跡

番号	遺跡(遺構)名	所在地	遺構の概要	出土遺物	時期	文献
			2-4号墳, 横穴式石室	鉄錐, 銅環	5C	
			2-5号墳, 横穴式石室		5C	
36	福元遺跡	宗像市大字福元	竪穴群 A143+α, B141+α	須恵器ⅡB期	6C後半	
39	福元久保遺跡	宗像市大字福元	竪穴5, 土壇15, 土壇12		弥生 前・中	
			古墳14 横穴(田群以集遺跡72主体)		4-7C	
			地下式横穴4, 柱穴1 近所遺跡			
40	福元宮ノ原遺跡	宗像市大字福元	古墳2, 石室土壇墓, 風葬器	須恵器, 土師器, 陶磁器	4-5C	
41	福元日焼塚遺跡	宗像市大字福元	竪穴1	須恵器Ⅱ-ⅢB, 土馬, 紡錘車	5C末- 6C後半	20
42	河東大浦遺跡	宗像市大字河東	竪穴7	土馬		21
43	須恵須賀浦遺跡	宗像市大字須恵	古墳13, 竪穴24, 横穴76		6C前半 -7C末	
44	福元日焼塚新池遺跡	宗像市大字福元	竪穴3	須恵器ⅡB-	5C 後半-	22
45	福元宮ノ原遺跡	宗像市大字福元	竪穴	須恵器ⅡB-	5C 後半-	23
46	以山5号墳	宗像郡, 津屋崎町大字 以山1174	古墳, 火葬墓	陶質土器, 土師器, 鉄剣, ガラス玉, 滑石玉, 鉄刀, 角, 鉄鏝, 鉄製輪元 鉄管, 鉄斧, 三角板(銅製), 勾玉, 管玉, 鏡		
47	王丸清勢遺跡	宗像市大字王丸104313か	古墳6	須恵器, 土師器, 鉄刀, 刀子, 鉄鏝	5C末- 7C	24

文 献

- 1 福岡町教育委員会 1981 手光古墳群Ⅰ 福岡町文化財調査報告書 第1集
- 2 前川威洋 1967 手光波切不動古墳 宗像郷土研究 第1号
- 3 宗像市地区社会教育振興協議会 1991 宗像の遺跡をたずねて  
-文化財所在マップの手引き-
- 4 a 九州歴史資料館 1974 九州古瓦と寺院  
b 九州歴史資料館 1981 九州古瓦図録  
c 伊東尾四郎 1944 宗像郡誌 上
- 5 a 青柳種信編 筑前国統風土記  
b 青柳種信編 筑前国統風土記拾遺  
c 九州歴史資料館 1981 九州古瓦図録
- 6 福岡県教育委員会 1973 津丸五郎丸遺跡 福岡バイパス関係埋蔵文化財調査報告書
- 7 波多野院三編 1974 津丸・久末古墳群 福岡教育大学歴史研究部考古学班
- 8 福岡町教育委員会 1986 手光長畑遺跡 福岡町文化財調査報告 第2集
- 9 宗像市教育委員会 1985 大井大屋敷遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書 -1984年度-  
宗像市文化財調査報告書 第9集
- 10 a 福岡県教育委員会 1979 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 X-XⅡ

王丸清勢遺跡

- b 伊東尾四郎 1944 宗像郡誌 上
- 11 宗像市教育委員会 1983 大穂町町口遺跡 宗像市文化財調査報告書 第13集
- 12 宗像市教育委員会 1987 光岡草場遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書 -1986年度-  
宗像市文化財調査報告書 第12集
- 13 福岡県史跡調査会 1967 東郷遺跡群
- 14 宗像市教育委員会 1989 東郷高塚 I 宗像市文化財調査報告書 第21集
- 15 a 宗像市教育委員会 1988 久原遺跡 -概報 古代宗像をさぐる-  
宗像市文化財調査報告書 第19集
- b 宗像市教育委員会 1988 久原遺跡 I 宗像市文化財調査報告書 第23集
- c 宗像市教育委員会 1988 久原遺跡 II 宗像市文化財調査報告書 第26集
- 16 a 宗像市教育委員会 1986 大井三倉遺跡 埋蔵文化財発掘調査概報  
宗像市文化財調査報告書 第10集
- b 宗像市教育委員会 1987 大井三倉遺跡 宗像市文化財調査報告書 第11集
- 17 a 宗像町教育委員会 1979 久戸古墳群 宗像市文化財調査報告書 第2集
- b 宗像町教育委員会 1980 久戸古墳群 II 宗像市文化財調査報告書 第3集
- 18 a 宗像市教育委員会 1979 相原古墳群 宗像市文化財調査報告書 第1集
- b 花田勝広 1990 宗像・相原古墳群の検討 地域相研究 第19号
- 19 a 稲元古墳群調査団 1976 稲元古墳群 第1期調査報告
- b 稲元古墳群調査団 1976 稲元古墳群 第2期調査報告
- 20 宗像市教育委員会 1989 稲元日焼原 宗像市文化財調査報告書 第22集
- 21 田中幸夫 1935 筑前発見祝賀鳥の二例 考古学雑誌25巻7号
- 22 轟次男 1979 宗像郡須恵新池の窯跡群の須恵器 響周の朋 6号
- 23 中川研治 1980 宗像郡河東字須恵周辺に所在する窯跡群について 地域相研究8号
- 24 宗像市教育委員会 1991 王丸清勢 宗像市文化財調査報告書 第33集

### 第3章 発掘調査の記録

伐採後の現況の地形測量の段階では、丘陵稜線上の南端で直径9m、高さ1mの高まりがあり、古墳と確認できた。この古墳の頂部から、北へ15m移った丘陵稜線上に、平面形は不整円形ながら高さ50cmの高まり部分があり、古墳であろうと推定できる程度であった。さらにこの古墳の北15mほどの丘陵稜線上に、直径6m、高さ50cmほどの高まりを確認した。このため、以上の3基の古墳が1支群を構成していたものと考えることができよう。

工事区の関係から、調査は南端の古墳と、その北側の古墳の北側墳丘部を残す形で実施した。

調査区の西側急斜面は、等高線と平行に走る細長い畑地が何段も作られており、現況では古墳は全く確認できなかつた。ただ西斜面の中ほどに等高線と直交して、長く、断面L字形に掘られた凹地があり、当初は樹木の抜き跡として考えていた。大字王丸清勢の地名を持つこの枝丘陵には、国道の北側に2群以上、南側に1群の古墳群が形成されていることになる。

今回調査の古墳群は時期的に2群に分けることができるため、全体としては4群以上の群構成が見られ、最北群のグループも調査によっては細分が可能となろう。

JR東郷駅の南口から南へ延びる市道は、本調査区を通して国道3号線と立体交差式に接続することになっている。

#### 1. S01

調査区南端の丘陵稜線上に位置する古墳である。現状は直径9mで、1mほどの高まりを有している。頂部は、平坦であるが範囲は狭い。墳丘の南側は3号線工事で削られ、西側は畑地により削られている。盗掘を思わせる地形の変形は認めることはできなかった。

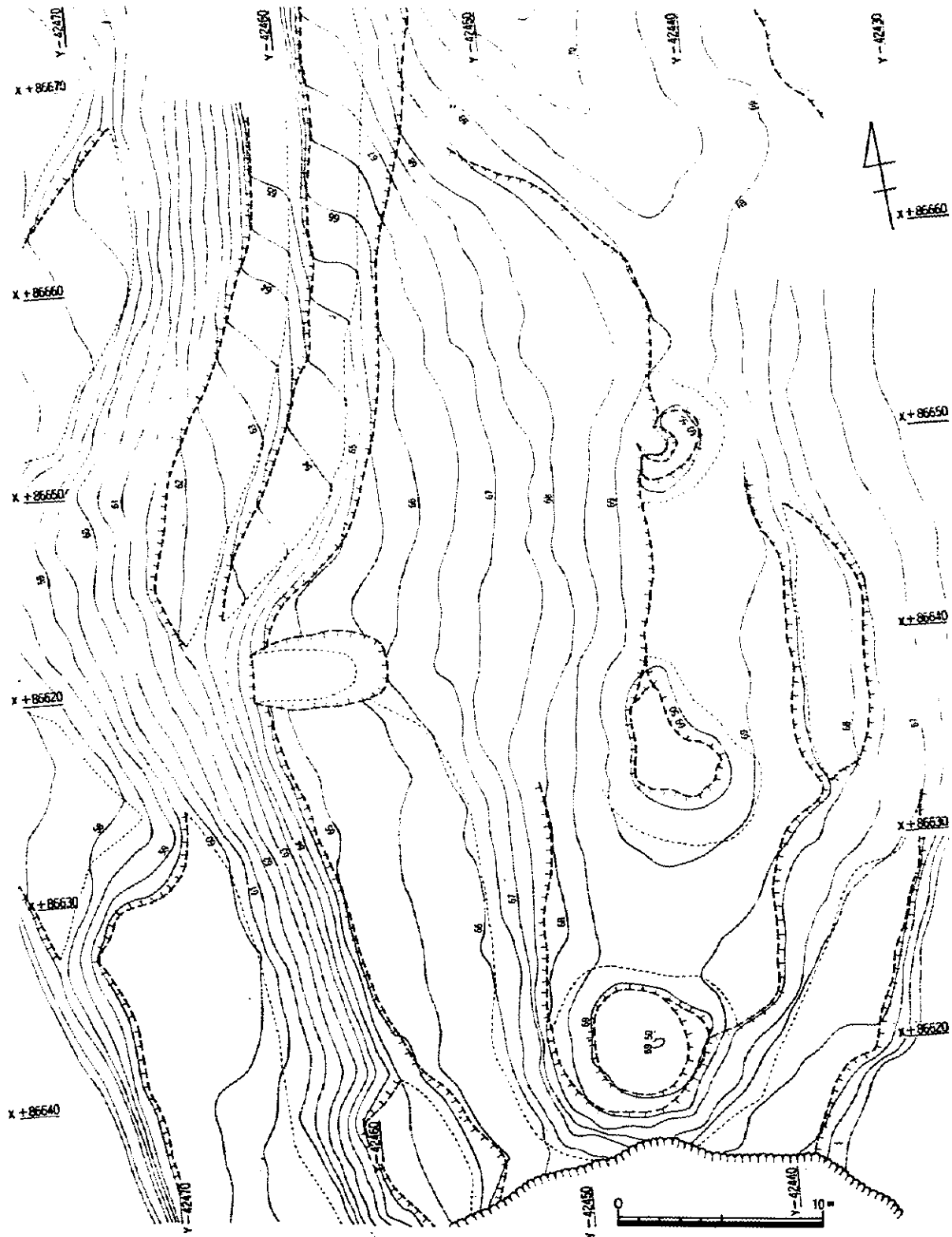
##### 1) 墳丘

墳丘の南および西側は、国道工事と畑地造成により、地形の変更が見られる。

**地山整形(第6図)** 古墳は丘陵稜線上に占地する。古墳の北側で、尾根線に直交して切る馬蹄形状の溝がまず掘られている。溝は上端で約5mの幅をもち、深さは尾根部で50~70cmを測る。溝の断面は逆台形状を呈している。墳丘の基底面は径7mほどの広さに平坦に削られ、南側に緩く傾斜する。基底面上には旧地表面は残っていなかった。石室の中心点から溝の内側底までは5.5~7mを測る。このことから墳丘規模を溝の大きさから推定すると、11~14mの間に入る円墳となる。

墳形が細い尾根による制約もあり、正円から南北に長めの楕円状を呈することがわかる。

**墳丘(第7図)** 墳丘の盛土は、各トレンチの土層から墳丘基底上に行っている。盛

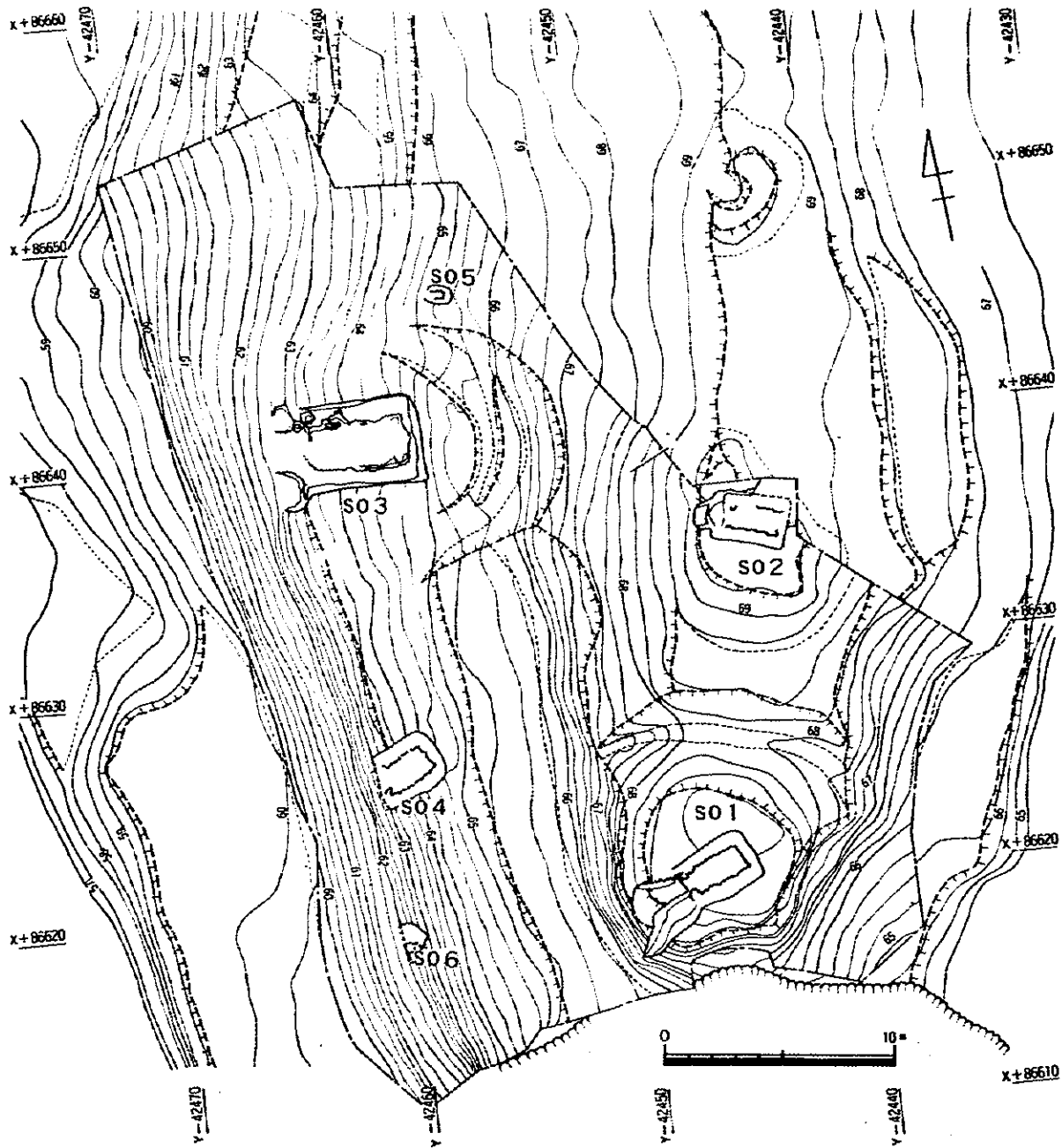


第5図 現況地形測量図(1/300)

王丸清勢遺跡

土は最大70cmの厚さに、天井石上では30cmの厚みに行っている。石室の裏込めの内、天井石上部と直下の石材間は粘土を使って目張りをしている。

全体として、天井石上部を薄く覆う程度の低い墳丘盛土である。



第6図 遺構配置図(1/300)

**墓 壙 (第6図)** 墓壙は墳丘盛土を除去して確認した。墳丘基底面のほぼ中央から掘り込まれ、主体部の墓壙は平面形が隅丸長方形となり、長辺は310~350cm、短辺は215~250cmを測り、長辺の中央がやや膨らみ、石室入口側の短辺がやや小さい。墓壙壁はほぼ垂直に掘られており、深さ140cmとなる。墓道前庭は墓壙の南西短辺から掘られており、前庭床面は150cmの長さに石室へ下降する傾斜をもち、玄門側端部で、石室床面とは約30cmの段差をつくる。前庭最高所から前面の墓道の床面は外へ緩い傾斜をつくる。

## 2) 主体部

**石 室 (第8図)** 石室は南西に開口する、単室の横穴式石室である。玄室は奥壁幅がやや広い長方形プランとなる。腰石は奥壁1石、左右側壁とも4石ずつ横位に据えている。奥壁部が最も大きい石材を使っている。各腰石の下部は腰石設置のための掘り込みを行い、腰石安定のための根石を配している。この種根石の配置は、宗像地域においては、玄室空間の拡大に伴う構築法であるが、本石室はその初現的なものと見られる。腰石上には花崗岩を主にした割石塊石を横位積みし、床面からの高さは140cm前後で天井石に達する。3壁の積石は小さく内傾し、持ち送り積みを腰石上から行っている。天井石は3石を残すが、原状は4石の花崗岩の巨石が考えられる。天井石下部の縦断面は奥壁側から玄門に向かって傾斜する。玄門は両袖となる。両袖石とも墓壙底からの掘り込み内に据えられており右袖の腰石は石室高の1/2、左袖の腰石は1/2弱の高さになる。

本石室の玄門部の特徴として、玄門袖部の腰石直上には連続する石積みを持たないことにある。腰石の張り出しは石室高の半分までであり、その上部は左右側壁の延長部にある。玄門袖石間には石室の内外を仕切る櫛石が置かれ、高さは15cmほど残る。櫛石上端と前庭の玄門側端部とは20cmほどの段差がつく。前庭部は右側壁は盗掘により失われているが、八の字形に開く、貼石状の構造である。左側壁をみると玄室側壁より、やや墓壙壁側に引いて構築されている。前庭積石の最下面は玄門袖石腰石の上端にそろっている。前庭側壁の末端からの、墳丘基底面を巡る列石等の施設は認めることはできない。玄室床面は、奥壁側の半分が盗掘により敷石を抜かれて、玄門側に拳大の小塊石による敷石が残っていた。

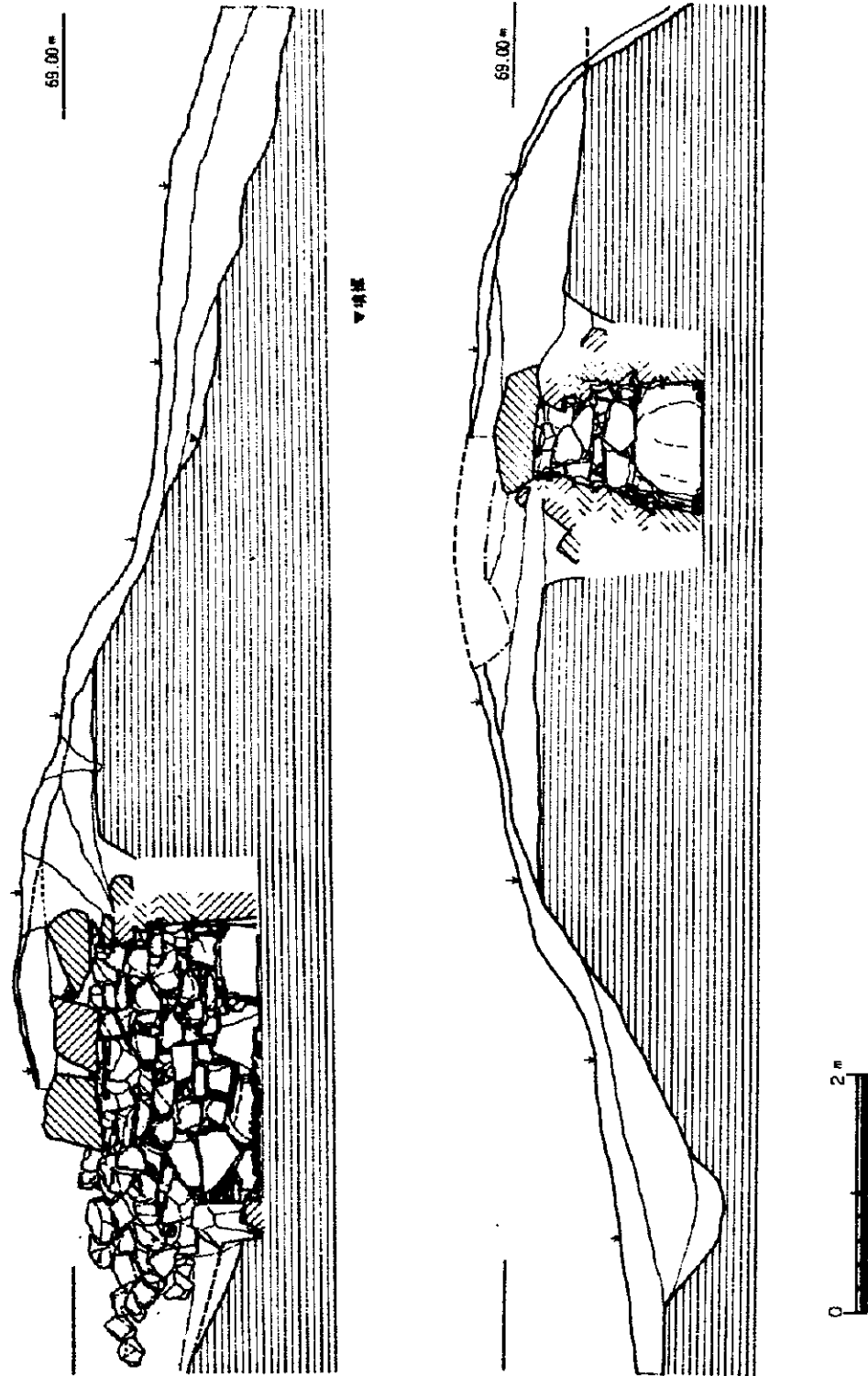
**閉 塞 (第9図)** 閉塞は玄門櫛石上に割石塊石を使って、2~3段の積石が残る程度であった。前庭側には補強のための石積みが1列、3~4段残っていた。

## 3) 出土遺物

出土遺物は鉄鏃4点、須恵器甕2点、須恵器甗1点が図示できた。図示できないものとして須恵器の高杯、甗、高台部片と青磁皿片がある。

**出土状況 (第10図)** 主体部が盗掘を受けているため、石室内からの出土遺物はわずかで

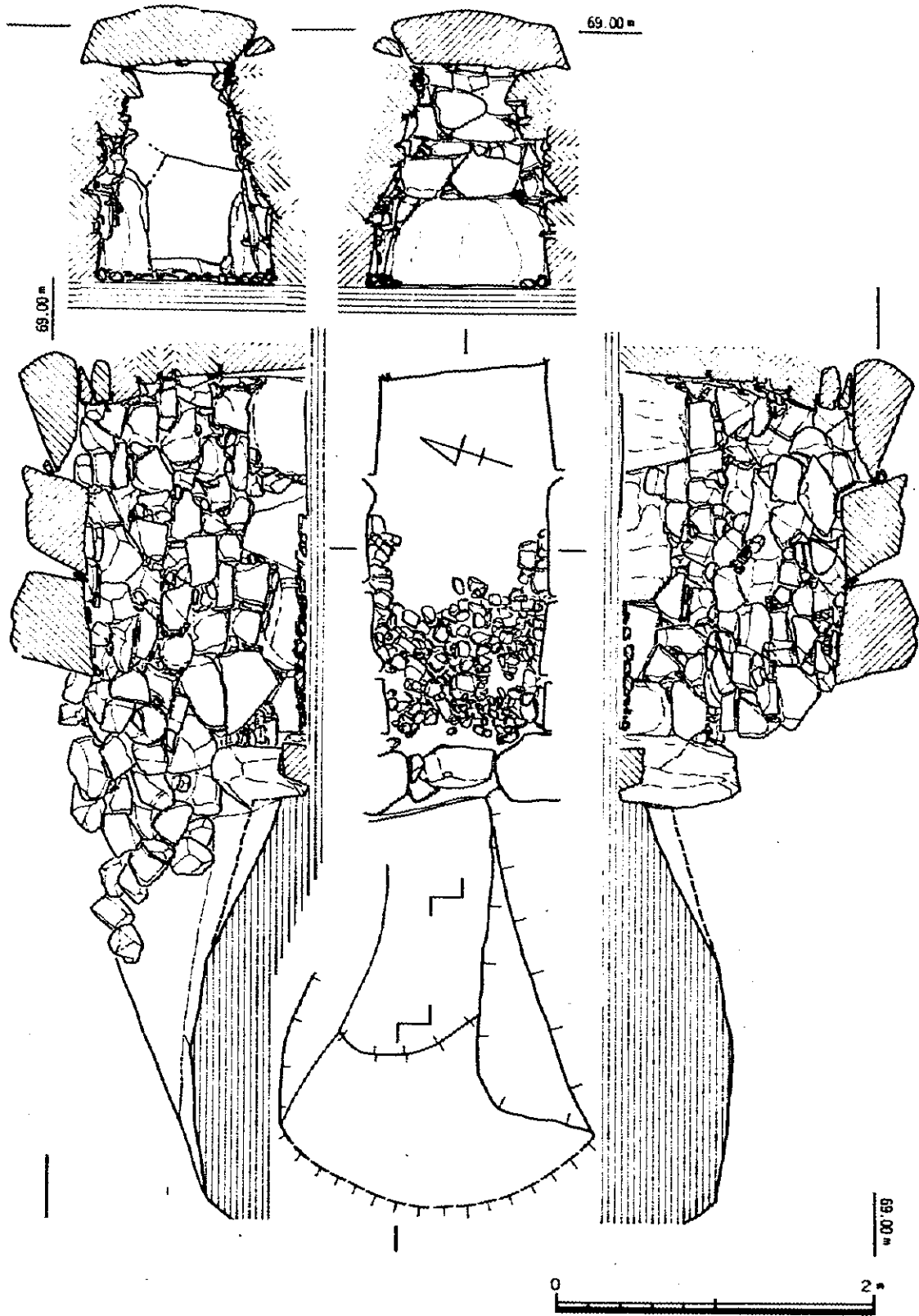
王丸清勢遺跡



第7図 SO1墳丘土層図(1/60)



王丸清勢遺跡



第8図 SO1主体部実測図(1/40)

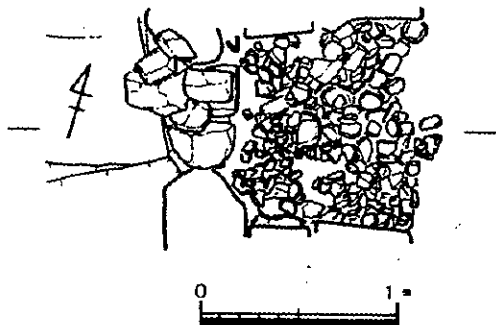
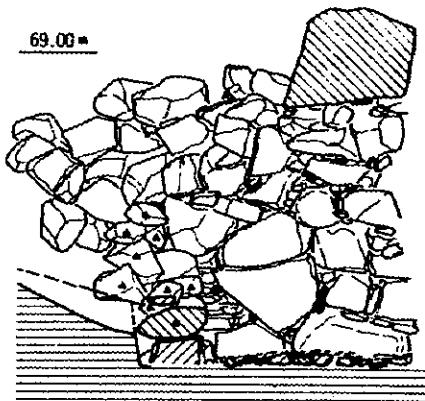
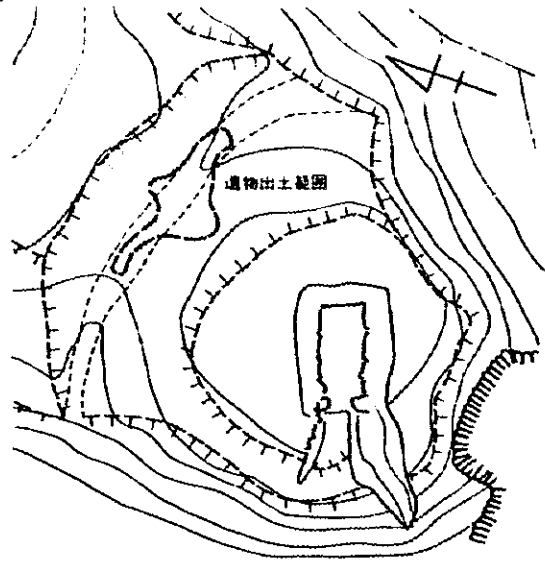
王丸清勢遺跡

あり、床面上の遺物はなかった。2区の墳丘表土および溝埋土の除去中に遺物の出土があった。遺物は甗と甗の2点であったが、甗は細片となって、全体としては墳丘上部から溝へ向かって流れ込むような出土状況であった。溝の底からの出土はなく、若干浮いた状況での出土であり、墳丘上で祭祀に利用された遺物が、祭祀の直後に、その場で壊されて、徐々に墳裾に向かって流れ込んできたものと考えてよい。

須恵器(第11・12図)

全て破片の出土である。

甗(1) 2区墳裾出土の完形品



第9図 SO1主体部閉塞状況(1/40)



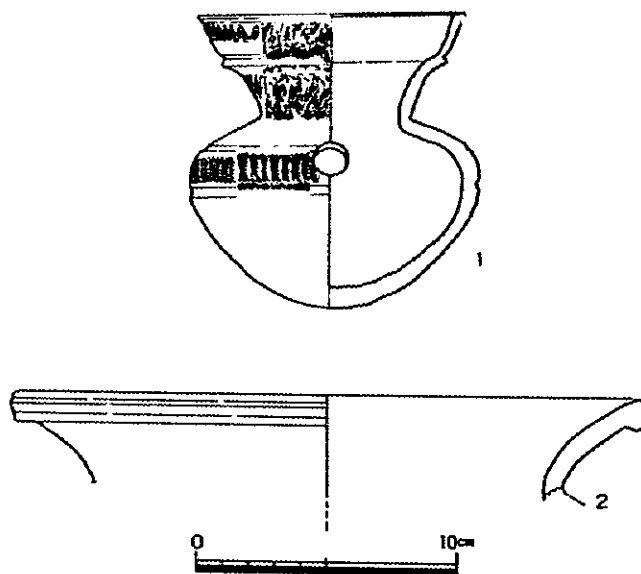
遺物出土状況



第10図 SO1遺物出土状況I(1/200, 1/40)

王丸清勢遺跡

である。頸部下半は外反して短かく立ち上がり、上半は内湾気味となって、広がりながら立ち上がる。口縁端部は上面に平坦面を有し、外端が外上方へつまみ出される。頸部屈曲部に断面三角形の突帯が一条巡り、稜は鋭い。体部は扁球形で、最大径が上位にくる。肩の張った器形となる。頸部と体部の境は明瞭で、底部は丸底となる。頸部外面の上下2段に各1条の櫛描波状文が巡る。体部最大径の部分に径2.3cmの穿孔があり、この部分で上下に1本ずつの沈



第11図 SO1出土遺物実測図1(1/3)

線を巡らして、沈線間を櫛描の連続文が付されている。体部下半は静止ヘラ削り後になで調整を施している。内面は底部に指頭圧痕を有し、上部は横なで調整である。口径10.3cm、器高11.7cm、体部最大径11.0cm。細砂粒を多く含み、焼成は良好、灰黒色を呈する。

**壺(2・3)** 2は前庭埋土から出土の口頸部片である。頸部は短かく外反して立ち上がり、口縁端部はコの字形で丸味をもつ。口端部直下は丸味を有する粘土帯が1条巡る。内外面とも横ナデ調整。細砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は暗灰色である。口径24.4cm。

3は2区の墳丘および溝の埋土から出土した。体部の1/3程を欠いている。頸部は短かく外反し、上半部で小さくS字状に立ち上がって、口端部は丸味を有する。口端部直下に2条の三角形粘土帯が巡る。粘土帯は稜が鋭い。頸部と体部の境は明瞭である。体部の最大径は上位にあり、肩の張る器形となる。口頸部の内外面とも横ナデ調整。体部外面は縦方向の平行タタキ、内面は同心円文をなで消している。砂粒を多く含み、焼成は良好。暗灰色を呈する。復元高42.8cm、体部最大径46.0cm、口径23cmを測る。

**武器(第13図)**

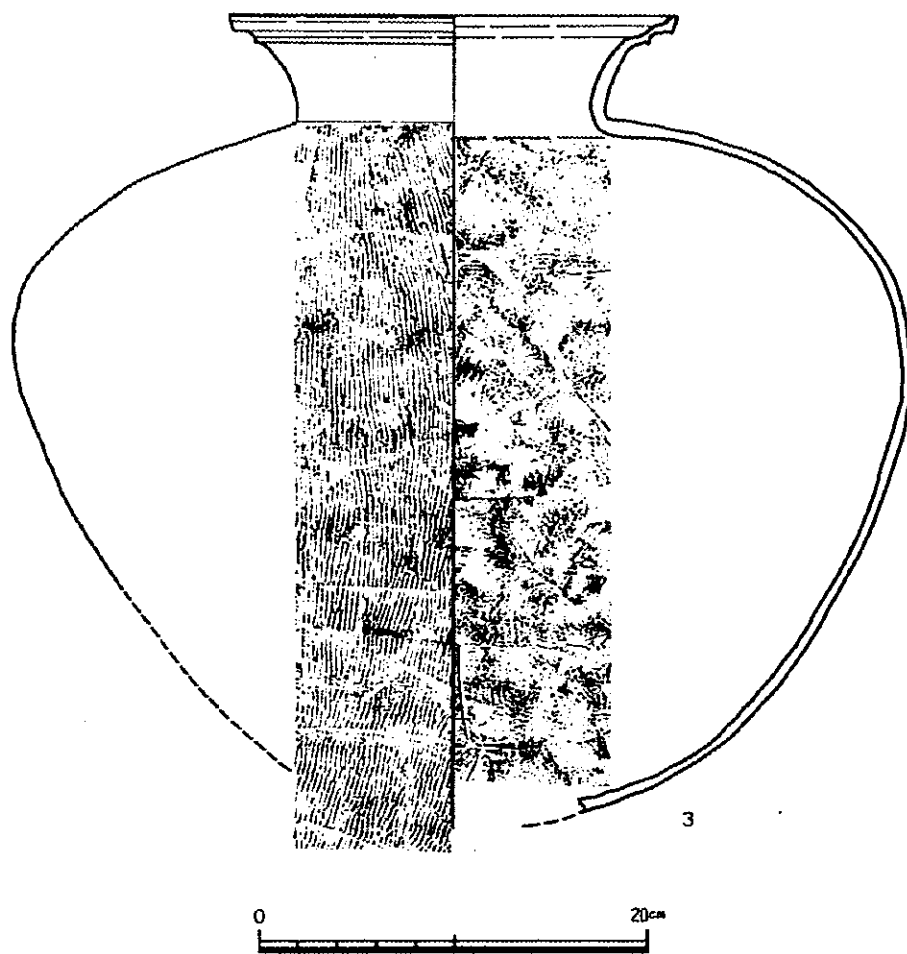
**鉄 鏃(4~7)** 破片で4点出土した。いずれも主体部の玄室埋土中のものである。

4・5は細根鏃で、身籠被部の境は不明瞭である。身の断面は片丸造りとなる。

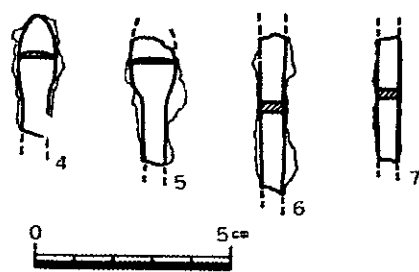
6・7は前記の籠被を構成するものであろう。

現存長で4は3.1cm、5は3.3cm、7は3.2cm、6は4.1cmを測る。

王丸清勢遺跡



第12図 SO1古墳出土遺物実測図2(1/4)



第13図 SO1古墳出土遺物実測図3(1/2)

## 2. S02

調査区の北東部にあり、丘陵稜線上に位置する古墳である。本古墳は周辺の地形から50cmほどの高まりを見せていたため、調査開始の時点では古墳と断定できないうちに、墓域の北半分は民有地となっており、墳丘を区画する地山整形の溝および1～2区の調査はできなかった。本古墳は調査の進行過程で、盗掘を受けていたことがわかった。

### 1) 墳 丘

頂部は平坦となり、盗掘を思わせる陥没等は認めることができなかった。現況測量時に南側で径9mの地形変換線が残っていたが、北半では不整の変換線となる。

**地山整形 (第6図)** S01と立地条件を同じとすることから1、2区の部分に墓域を区画する馬蹄形の溝が推定できるが、未調査区であり、本古墳の時期を決定できる土器の出土も、この溝中に考えられる。このため地山整形の復元は3区の1部と4区部分の調査によっている。

S01、2間の関係を知るためのトレンチ調査により、S01の馬蹄形溝の外端から北へ約2mの地点で緩い傾斜変換点を確認できた。この地点がS02の南側墳裾にあたる。墳裾から中心に向かって約3mほど傾斜面が続き、墳丘基底面は中心から径5～6mの範囲に平坦面をつくる。墳丘基底面上には旧地表を認めることはできない。3、4区の地山整形面の調査から、最大径12mの南北に長めの楕円状の墳形となる。

**墳 丘 (第7図)** 墳丘の盛土は墳丘基底面上および墳丘傾斜面上に見られる。盛土は墓壇端部で30cmほど残っていた。墳丘盛土となる列石等の施設は存在しない。

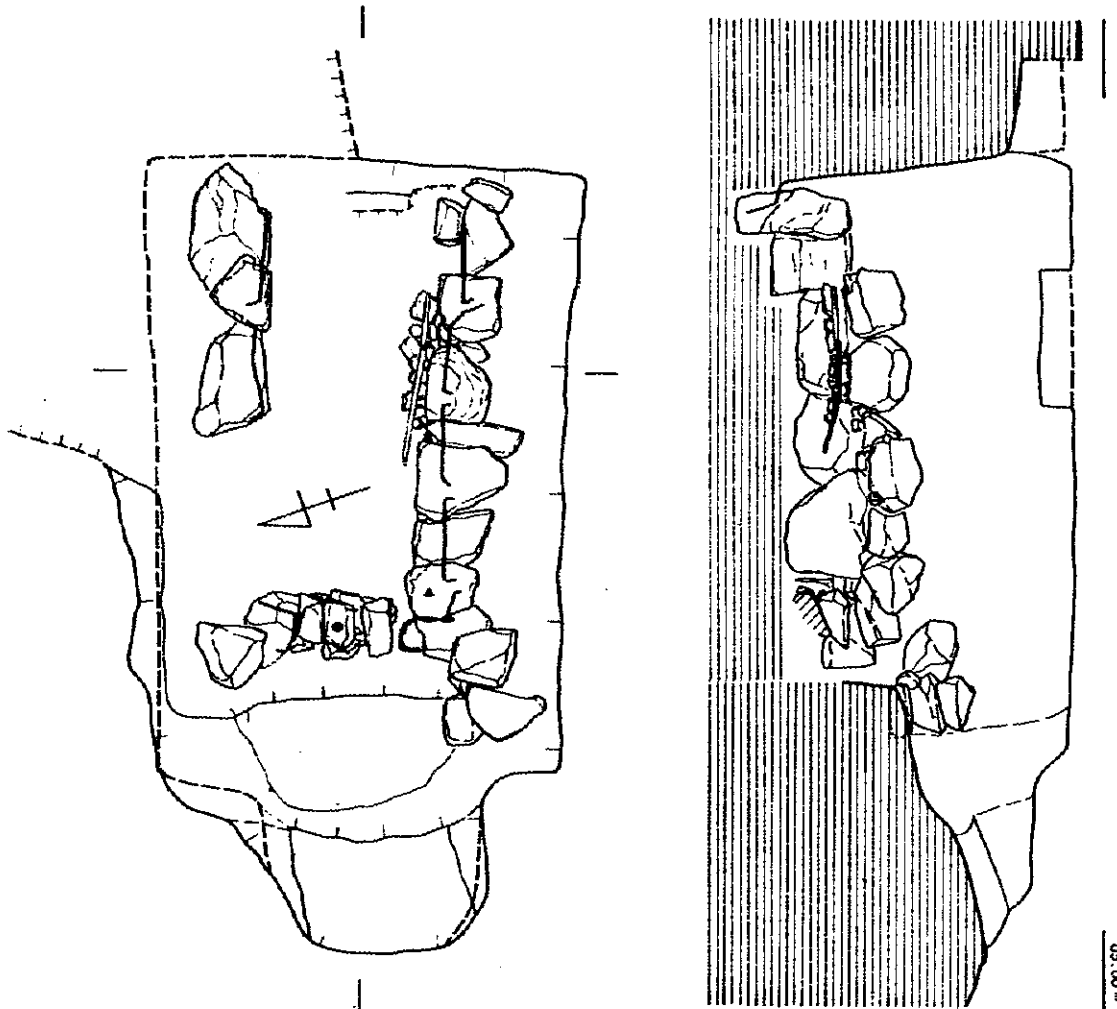
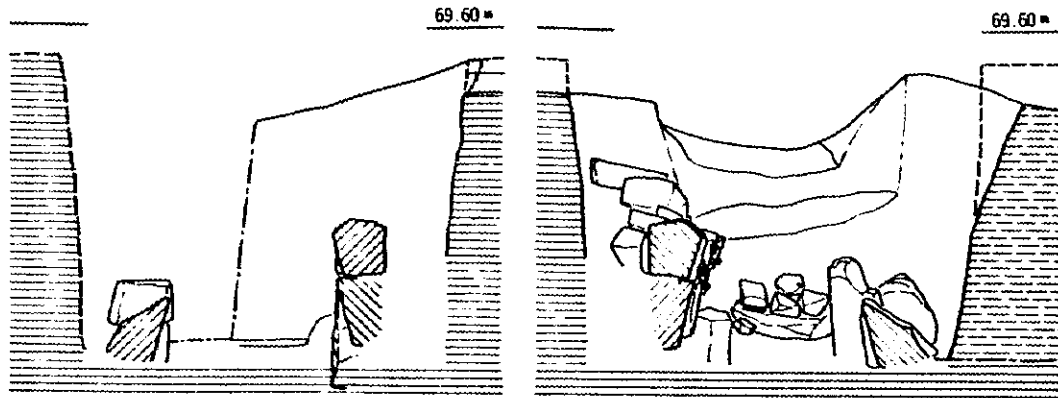
**墓 壇 (第14図)** 墓壇の掘り込みは墳丘基底面のほぼ中央に掘られているものと、S01との比較から推定できる。隅丸の長方形掘り込みは、長軸が屋根稜線に直交する。1、2区で盗掘により、墓壇壁を失っているが、推定で長さ3.1m、幅2.1mとなる。墓壇壁の傾斜は急で約1.5mの深さで墓壇底となる。墓壇の西端は南北1.1m、東西0.5mほどの半円形のテラスが設けられており、墓壇底とは約60cmの段差となる。墓道は墓壇西壁の中央から掘られ、長さ約1mとなり、墓道床は石室に向かって下降する。墓道の前面は自然地形となる。

### 2) 主 体 部

調査前の現況に比して、盗掘の度合が大きく、特に2区の位置からの盗掘により、石材の大半が抜かれ、あるいは墓壇内に崩れていた。

**石 室 (第14図)** 西に開口する、単室の横穴式石室である。盗掘による破壊が大きく、石室上半と腰石の一部は抜かれ、床面もわずかに残る程度であった。玄室は奥壁の幅が玄門側に比べ、やや広い長方形のプランとなる。腰石は、奥壁の1部が抜かれているが、現存の1石

王丸清勢遺跡



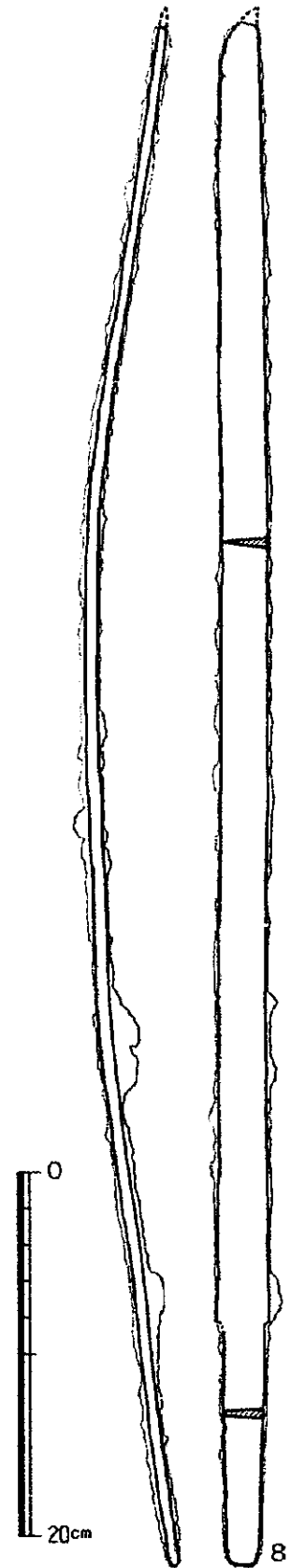
- S02 2 石材サンプル
- ▲ S02 1 石材サンプル

第14図 SO2主体部実測図(1/40)

王丸清勢遺跡

と大きめの石材が1石据えられていたものと推定できる。側壁は右が5石あり、左も4～5石が考えられる。石材は横位ないし立位に据えられ、腰石の上端の高さは合わせており、石棺系の石室として意識したものであろう。腰石上には、右側壁で割石塊石を横位に小口積みして1段だけ残っていた。玄門部は両袖構造となり、袖石上端は玄室腰石の上端よりやや上位にくる。袖石上の積み石は全て失われているが、袖石の内側の面を合わせて積み上げたものと推定する。袖石間にはやや大振りの石材を横位にとって柵石基部としている。その中には小振りの石1～2段残っていた。腰石の下部にはSO1に見る根石構造はなく、SO1古墳の石室よりも石室空間が狭いことが考えられる。敷石は右側壁際に一部が残っていた。前庭部はテラス整形面の上に積石があり、側面は玄室のラインの延長上にある。前庭石積みは右側壁で2列あり、高さは3段残っていた。石室の石材はSO1に比べ、腰石、側壁石、袖石とも小振りとなっている。

閉塞(第14図) 調査時にわずかに一石の板石が残っていたが、図、写真はとることができなかった。この板石は60×50cmほどの長方形で厚さ6～8cmあった。閉塞は柵石と前庭端部との間に据えられて、石材の下端は前庭床と同じにあった。

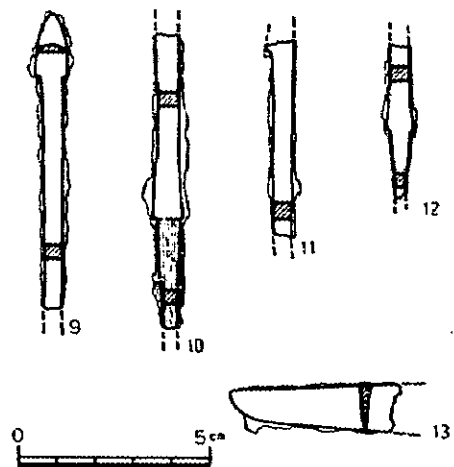


第15図 SO2古墳出土遺物実測図1(1/4)

3) 出土遺物

出土遺物は盗掘による破壊で、出土量は少ない。完形の鉄刀1、刀子片1、鉄鏃4点が全出土量である。

出土状況(第14図) 土器類の出土はないが、この時期の古墳の特徴として、大半の土器類は1、2区未調査区に求めることができよう。唯一、原位置を保つと考える遺物が、玄室右側壁際の床面出土の鉄刀である。鉄刀は側壁と平行して置かれ、切先を玄門に向けていた。その他の刀子と鉄鏃は玄室の盗掘壊埋土の除去時に出土したものである。



第16図 SO2古墳出土遺物実測図2(1/2)

武器(第15・16図)

鉄刀(8) 切先の一部を欠いている。背は平造りで直線的となる。関部は両関となるが切れこみは明確ではない。茎の胴部は刀身側の幅がやや広い。茎尻の端部は丸みを有する。目釘孔は不明である。復元全長86.9cm、同刃部長73.5cm、茎部13.4cmを測る。

鉄鏃(9~12) いずれも細根の鏃である。9は筥被以下を欠くが、両関が直角となり、片丸造りの鏃身となる。10は筥被部片で、筥被は裾広がり後、下端は直角となる。茎部に木質が遺存する。11は鏃身の一部が残る。片刃造りで、関は片関となり、逆刺状となる。12は筥被部片で筥被は裾広がり後、下端は緩やかにおさまる。

工具(第16図)

刀子(13) 切先の破片である。現存長4.4cmを測る。



### 3. S03

調査区の北西部に位置する古墳である。西側急斜面に立地しており、かつて開墾された段々畑の一面を占める。現状は等高線に直交する馬蹄形状の大きな凹地となっており、当初は樹木の抜き跡くらいに考えていた。

#### 1) 墳 丘

段々畑の造成により、墳形は全く認めることができなかった。

**地山整形 (第6図)** 主体部が等高線と直交する主軸をとっており、墓壇の上部斜面に馬蹄形の溝が掘られている。溝は2、3区の中でおさまっており、両端は自然地形に消えている。溝の最大幅は上端で4m、溝底は1.5mとなる。横断面は逆台形となるが地形の傾斜に相当制約を受けている。溝外側の傾斜整形面には半月形の小さなテラスが設けられているが、施設、遺物を認めることはできなかった。墳丘基底面は旧地表を整える程度であり、ほぼ自然傾斜に近いが、基底面上には旧地表土は残っていなかった。

**墳 丘 (第17図)** 墳丘盛土は墳丘基底面になされている。Aトレンチの土層では墓壇端で70cmほどの盛土が確認できた。Bトレンチでは馬蹄形溝の内側下端から盛土が始まり、墓壇端で高さ80cmほど残っている。Cトレンチでは墳丘基底面上に盛土があり、約40cmの高さに1枚の盛土層がある。相対するA、Cトレンチの盛土裾間は6.1mを測る。さらに地山整形の裾間は8.6mを測る。Bトレンチの墳裾と墓壇の先端との間は約9mを測る。このことから、ほぼ9m規模の円墳と考えることができよう。

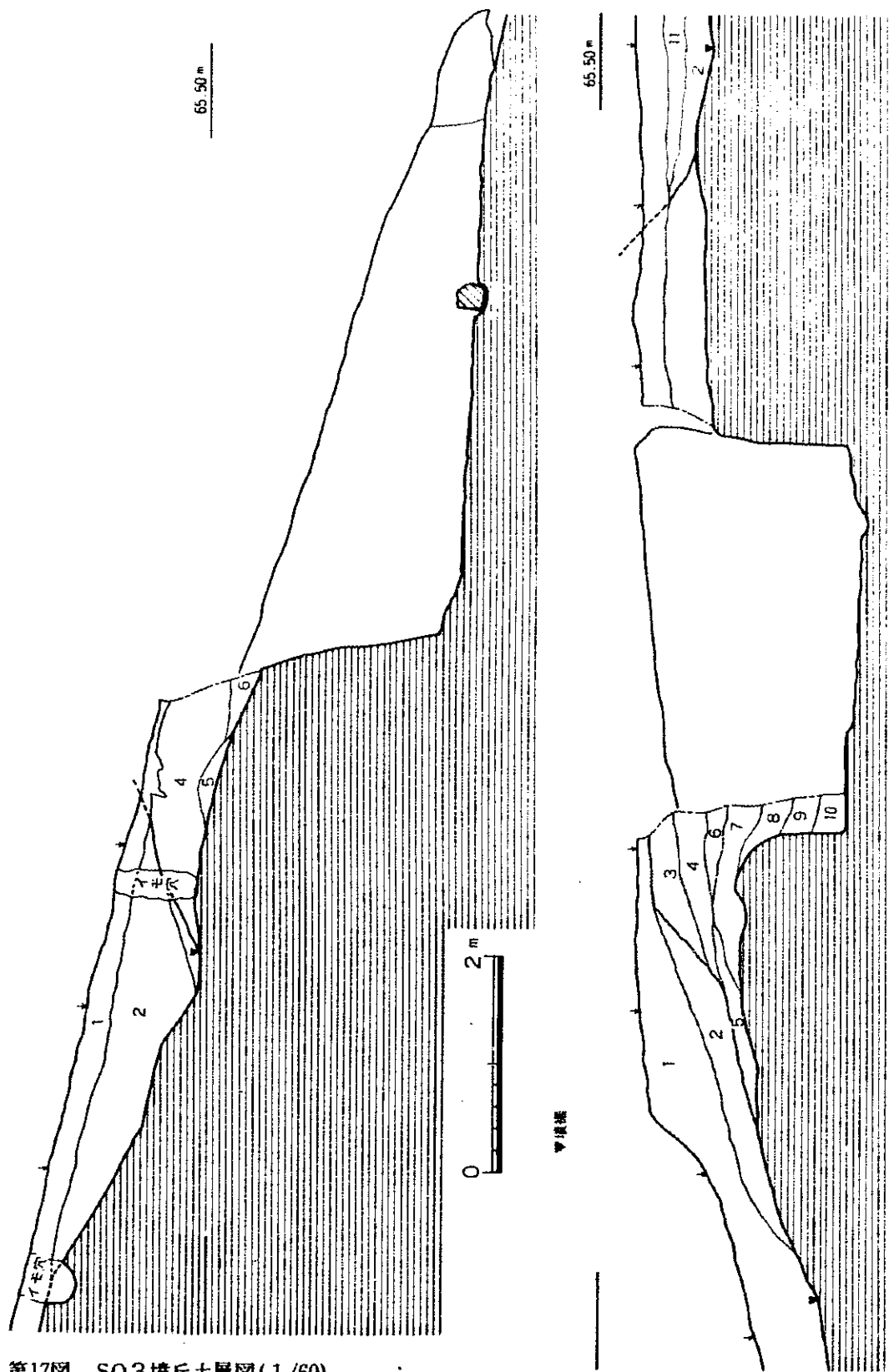
**墓 壇 (第17図)** 墓壇は墳丘基底面のほぼ中央にあり、長軸を等高線に直交する長方形に掘られている。墓壇上端で東西約5.5m、南北約4mを測る。墓壇の長軸断面はL字形となり、西側の端部は自然地形に消えている。墓壇壁は、ほぼ垂直となり、最深部で2mとなる。北側墓壇壁の上端は丸味を持ち、石材搬入のためかと考えられる。墓道の構造は不明である。

#### 2) 主 体 部

盗掘破壊により、大半を失っており、詳細を知ることは不可能である。

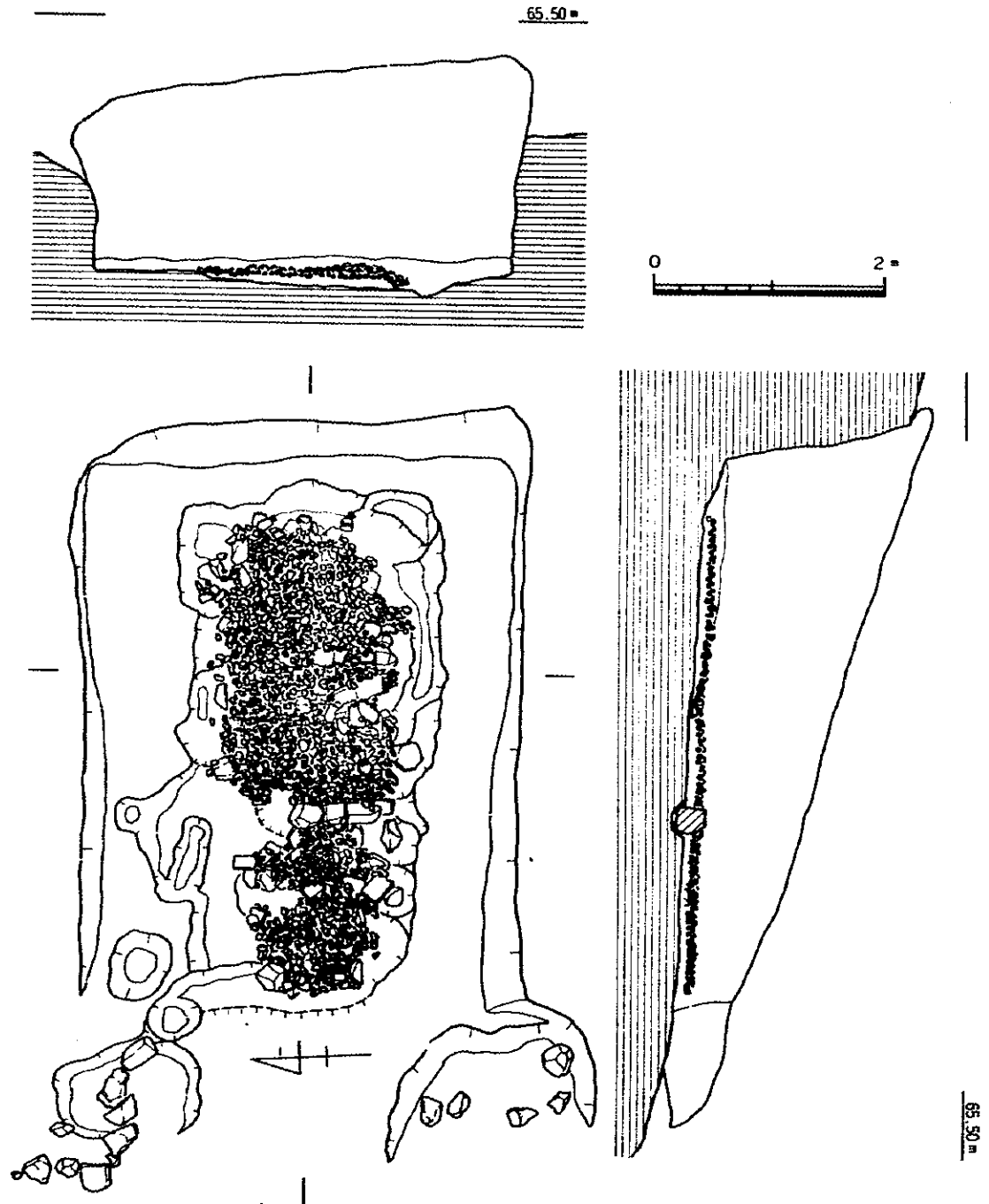
**石 室 (第18図)** 敷石のみが残存する状態であり、構造を知ることはできない。敷石の残り具合からすると、西に開口する、単室の横穴式石室が考えられる。石室の全長は約4mまで確認できる。玄室は長さ約2.5m、幅約1.5m前後となり、玄門は両袖と考えられる。玄門部には榑石が3石分、埋置されている。羨道部の敷石は約1.5m残っている。石室の壁体構造は不明である。墓壇先端の浅い掘り込み内に石材が並べられているが、おそらく1、4区の墳裾を囲むものであろう。古墳の立地が急傾斜となっていることもあり、外護列石としての考え

王丸清勢遺跡



第17図 SO3墳丘土層図(1/60)

王丸清勢遺跡



第18図 SO3主体部実測図(1/60)

方ができよう。

閉塞 石室の盗掘、破壊により、閉塞についての観察はできなかった。

### 3) 出土遺物

出土遺物は徹底した盗掘で、古墳に伴うものはわずかであり、実測不能のものである。

古墳以外のものとして、土師器が1点出ている。

#### 土師器 (第19図)

高台付椀 (14) 3区の馬蹄形溝埋土から出土した破片である。底部は平底で、体部は外傾して、湾曲しながら立ち上がる。口縁端部は丸い。高台は底部外端にあり、端部は外方へ引き出される。体底とも丁寧な磨きがあり、糸切り離しとなる。口径11.6cm、器高3.4cm、高台径7.6cm、高台高0.5cmを測る。



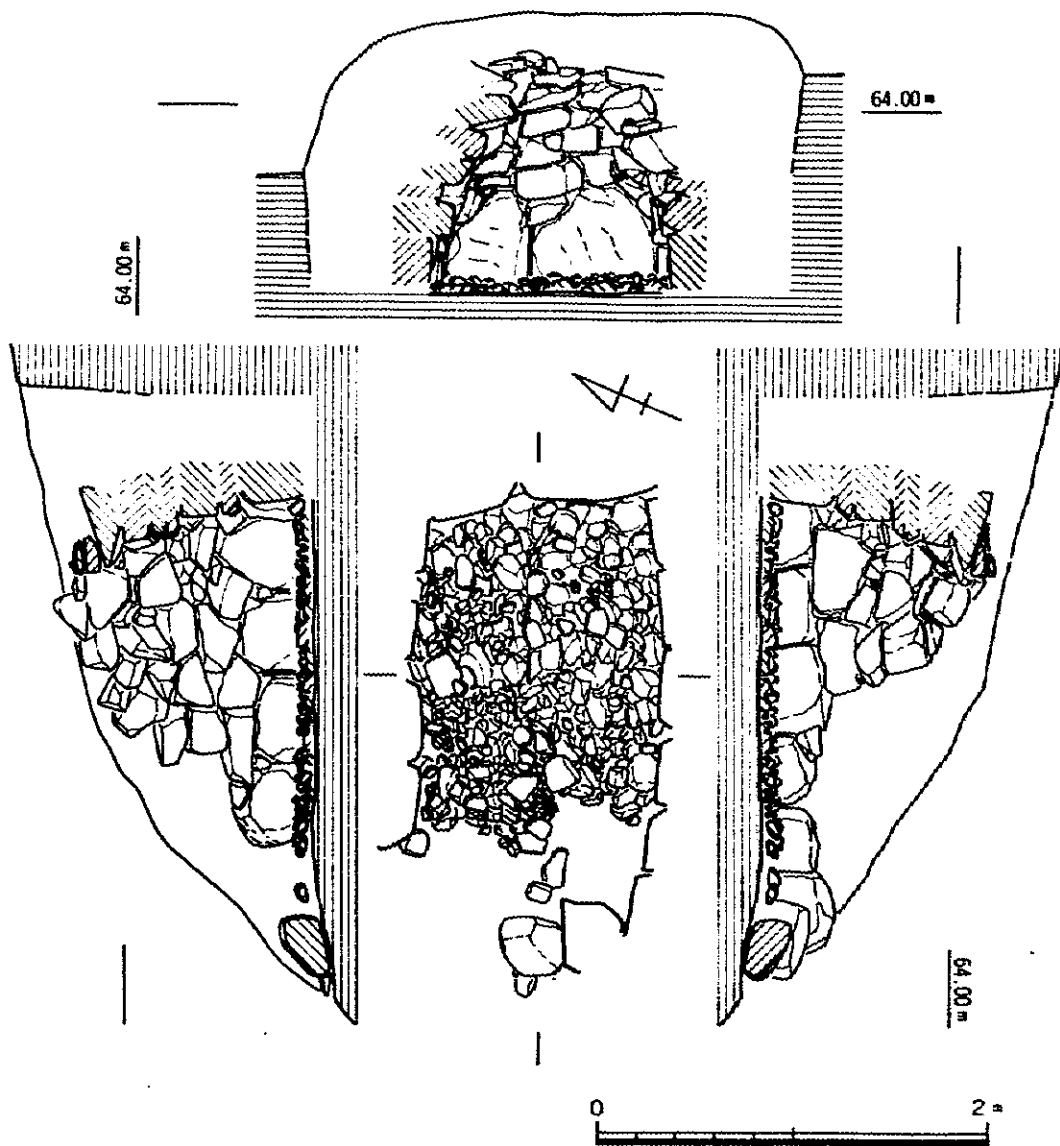
第19図 SO3古墳出土  
遺物実測図(1/3)

#### 4. SO4

調査区の南西に位置する古墳である。西側急斜面に占地があり、現況は自然地形に隠れており、表土除去後に発見できた。SO3の南14mにある（石室の中心間）。

##### 1) 墳丘

開墾により、墳丘は大半が失われている。



第20図 SO4主体部実測図(1/40)

地山整形(第6図) 表土除去後に墓墳の上位に馬蹄形状に浅い黒色土層を確認したが、地山整形による溝の形成を断定するに至らなかった。

墓 墳(第20図) 墓墳の主軸は等高線に直交しており、ほぼ隅丸の長方形となるが、西側は削平を受けている。墓墳壁はほぼ垂直に立ち上がり、奥壁の最深部で約1.5mを測る。墓道の構造は不明である。

## 2) 主体部

墳丘が削平を受けていた割には残りはよいと言えるが、それも奥壁のみである。

石 室(第20図) 主体部は主軸が等高線と直交して、西へ開口する単室の横穴式石室である。平面プランは、右側壁が膨らむ長方形となる。腰石は奥壁に2石、右側壁6石、左側壁5石(推定)となる。奥壁には最も大きい石材を横位と立位に据えている。側壁は横位ないし立位の据え方となっている。腰石上の石積みは持ち送りが強く、4～5段に横位積みをしており、最上段がほぼ天井石下面の高さとなる。玄門部は両袖となり、袖石は側壁の石材の同程度のものである。玄室内は拳大の石材を前面に敷いていたものであろう。腰石埋置のための掘り込みは浅く、また、腰石間下の根石をもたず、石室の小型化による基礎構造の省略と考える。石材は全て花崗岩である。

袖石間に一石の据石が残っているが、ここでは欄石では閉塞石の可能性があり、欄石を設けない構造と捉えている。

## 5. S05

調査区の最北に位置する古墳である。S03周辺の表土除去中に確認したもので、ここでは古墳として扱う。

### 1) 墳丘

表土除去中に検出遺構であり、墳丘については不明である。

**地山整形 (第6図)** 全体に削平を受けており、地山整形について明らかにすることはできない。

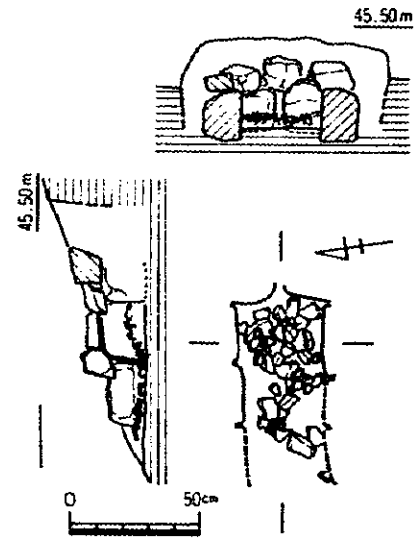
**墓 墳 (第21図)** 急斜面に主軸が等高線に直交するように墓墳を掘り込んでいる。平面形は隅丸長方形となり、長さ1.1m、幅0.8mを測る。墓墳壁は垂直に立ち上がり、奥壁で40cmの深さとなる。墓道については不明である。

### 2) 主体部

削平により、主体部の西半および上半部を失っている。

**石 室 (第21図)** 主体部は西半部が失われており、全体の構造を知ることはできない。墓墳底の腰石埋置のための掘り込み観察から、西に開口する小形の横穴式石室としておきたい。平面形は無袖のもので、コの字形となる。腰石は奥壁に2石、側壁に3石ずつの配置が考えられる。3壁の石材は同大のもので、花崗岩の塊石を横位に据えている。腰石上には、腰石より小振りの塊石が1段分残っている。床面は拳大の石を全面に敷いてある。石室の長さは0.7m+ $\alpha$ 、幅は0.31~0.34mとなる。

この遺構に伴う出土遺物はない。



第21図 S05主体部実測図 (1/30)

## 6. S06

調査区の南西部に位置する古墳である。表土除去中に確認できたもので、調査中、最も低い位置に存在する遺構である。

### 1) 墳丘

確認以前は、現況が急斜面を呈しており、墳丘を全て失っている。

**地山鑿形 (第6図)** 遺構の確認時には、遺構の大半を失っており、築造に伴う整形を知ることはできない。

**墓 墳 (第22図)** 削平による破壊をうけており、墓墳は奥壁部の一部が残る程度である。主体部の

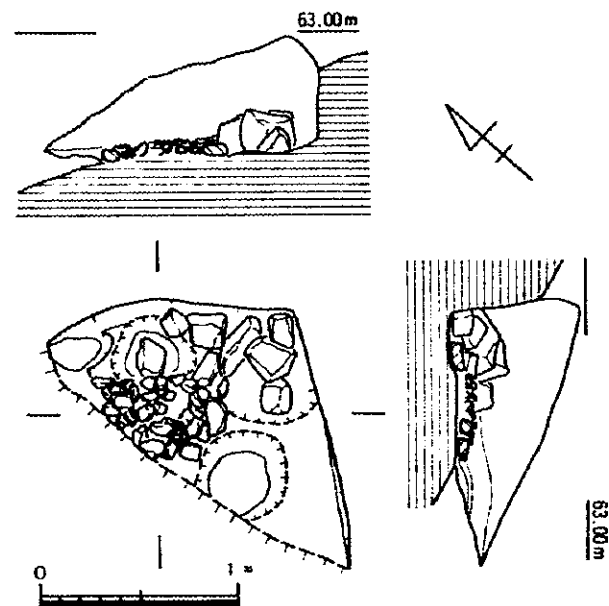
主軸は等高線に直交しており、おそらく隅丸長方形の墓墳を掘り込んだものであろう。墓墳壁は垂直に近く、奥壁で、深さ0.7mを測る。

### 2) 主体部

主体部の石材は全て失っており、おそらく畑地の開墾時に抜かれたものであろう。

**石 室 (第22図)** 石材を失っているが、他の古墳との比較から、主軸を等高線と直交する、西に開口する横穴式石室と考えられる。石室構造は、その位置関係からして、S04古墳と同系のものといえる。床面には拳大の石材を全面に敷いている。

本古墳に伴う遺物の出土はない。



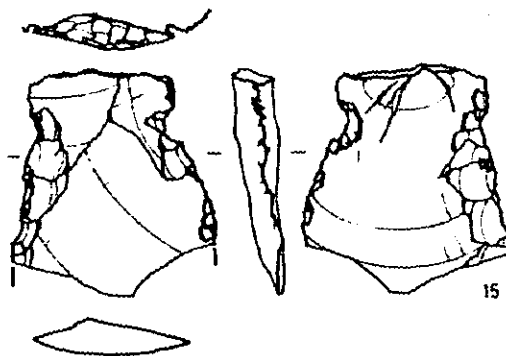
第22図 S06主体部実測図 (1/40)



## 7. その他

S01古墳の1区地山整形面から、1点の石器が出土した。本遺跡の遺構とは直接関わるものではないが、ここで紹介しておきたい。

剥片石器(第23図) 地山整形面から出土した。縦長の剥片を素材とする石器である。現状では、打面を上位とした場合の石器下半部を欠く。素材の両側縁に、表裏両側からの、連続する剥離による加工をおこなっている。剥離作業は、打面近くの両側縁で、抉りを形成している。特に、図上



第23図 石器実測図(1/1)

右辺のそれは、顕著である。為に、一見石匙の摘み部かとみえる。しかし、素材の最も厚い部分は打面であり、それから素材先端に向かって極薄くなる事を、欠けている下半部に復元できることから、所謂石匙の刃部に相当する部分が考えられない。素材打面は、調整打面であり、その成す稜部分を打点としている。石材は、いわゆる安山岩で、石器表面の風化の度合いは比較的軽いといえる。現状で、長さ3.0cm、幅は下端部で2.7cm、厚さは打癭部で0.5cm、重量3.7gをそれぞれ計る。

この石器が属する時期については、今のところ判断の為の材料を持たない。

## 第4章 まとめ

本遺跡は、同一丘陵に分布する10数基の古墳からなる墓地である。今回の調査は群の南側を占めるグループが対象であり、最南部の国道部分にまで遺構が延びるかどうかはわからない。

調査を実施した6基の遺構は、占地等から2群に分けることができる。

A群 丘陵の稜線上に分布する。…S01・S02

B群 丘陵斜面に分布する。…S03・S04・S05・S06

### 古墳の築造について

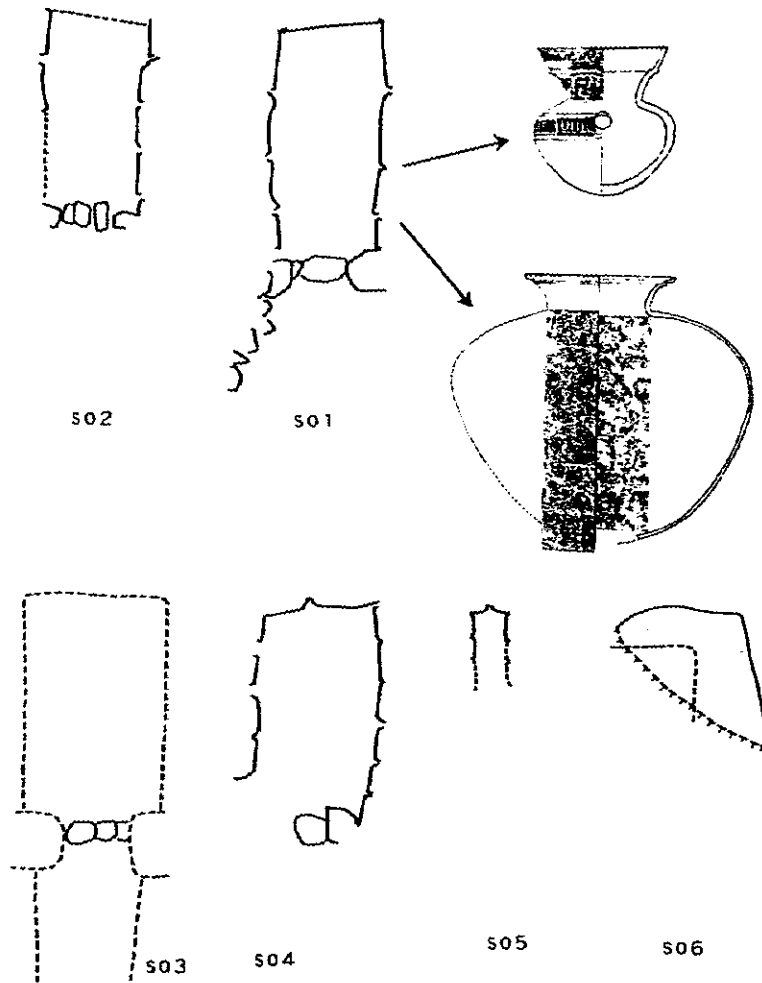
遺跡は、宗像市西南部に位置する許斐山北麓の標高60~70mの丘陵稜線上および斜面にある。

A群の地山整形は、細い丘陵上にあるため墳丘基底面全域の整形は難しく、東側および西側斜面は自然地形のままとなっている。このため、墳裾のラインは円形を描かず、東西では自然地形に消えている。稜線上は、北側を馬蹄形状に丘陵を切断し、南側は地山の削り出しにより、墳墓域を区画している。

墳丘基底面は、ほぼ平坦に整えており、端部の径は約6mに復元できる。

墓壇は、墳丘基底面の中央にあり、主軸は丘陵稜線に直交する。平面形は隅丸長方形となり、各辺とも直線的で、墓壁は垂直である。

前庭・墓道の掘り込み



第24図 主要古墳主体部一覽 (1/80)

は、墓壙西壁の中央に取り付き、石室に向かって下降する床面となる。

B群の地山整形は、削平が大きく細部を知り得ないが、S03古墳では墓域を区画する馬蹄形溝は2・3区に認められ、A・Cトレンチ部分で自然傾斜面に消えている。

墳丘基底面は、地形に大きく制約されており、自然傾斜面を整える程度となっている。

墓壙は墳丘基底面の中央にあり、主軸は等高線に直交する。墓壙の西端は自然傾斜面に消える。

A・Bともに共通するのは墓壙の深さであり、本遺跡においても宗像的特質の墓壙となっている。このことは、墳丘の調査において葺石、列石等の補強施設を認めることができなかつたことと強いかわりがある。深い墓壙は、それ自体が主体部強化のための墳丘の役目を果たしていることが主な要因となっているためである。

#### 石室構造について

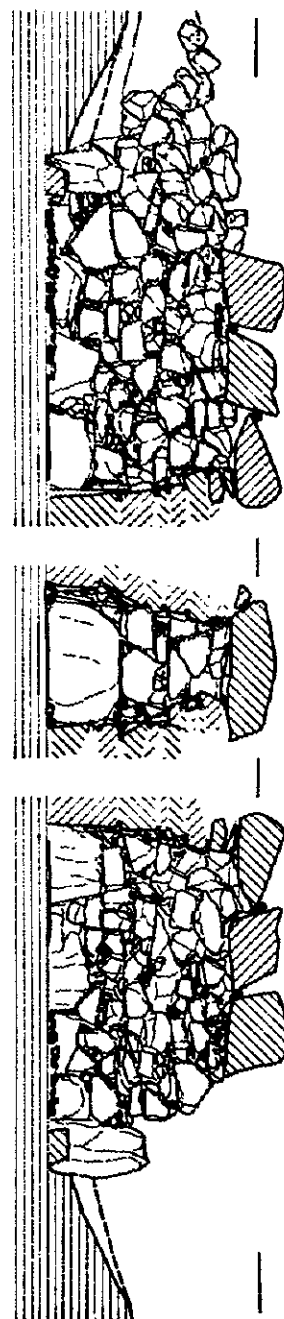
各遺構の主体部は、全て横穴式石室となる。

A群の石室は、単室の横穴式石室で羨道を持たず、前庭・墓道を付設する構造となる。

玄室の平面形は、奥壁幅がやや広い長方形となるが、S01は少し歪んでいる。

玄門部は両袖となり、袖石間は柵石が配されている。袖石の高さはS01で玄室高の約1/2、S02では1/2以下となっている。

玄室の基礎構造についてみると、S02の腰石下には根石を配しておらず、S01で根石は顕著となる。S01使用の石材は、S02に比べ大形化しており、玄室も大きく、玄室空間の拡大による基礎構造の補強が、根石の配置となって現われている。



第25図 S01壁体の構造 (1/60)

上丸清勢遺跡

表2 古墳規模一覧表

古墳番号	立地	墳形	墳丘規模 m	墓 塚			主 体 部				外部施設	
				方 向	最大長	最大幅	最深部	構 造	上 軸	玄室床面積		玄室面積
S01	丘陵稜線上	円墳	9~14	稜線直行	347	256	138	横穴式石室	西南に開口	67.41㎡	2.4㎡	馬蹄形溝
S02	丘陵稜線上	円墳	12	稜線直行	(318)	(224)	(150)	横穴式石室	西に開口	68.23㎡	2.0㎡	
S03	西側斜面	円墳	8~9	等高線直行	540	400	180	横穴式石室	西に開口	63.30㎡	3.7㎡	馬蹄形溝
S04	西側斜面			等高線直行	330+α	255	151	横穴式石室	西に開口	63.10㎡	2.6㎡	
S05	西側斜面			等高線直行	107	81	36	横穴式石室	西に開口	65.17㎡	0.2㎡	
S06	西側斜面			等高線直行				横穴式石室	西に開口	62.52㎡		

( ) は復元値

S01の玄門袖石上には、石積みは続かず、袖石は単に玄門の内外を仕切るためのみに配置があり、後続する横穴式石室の玄門部構造とは異なっている。

袖石部の構造からすると、玄門上部には楣石は架構されていないものと考えられる。

壁体の構造では、S01の玄室左側壁は玄門の内外で、石積みに変化はなく、奥壁側から前庭貼石に至るまで連続する。

A群の石室構造は、市域の浦谷C-4号墳<sup>註2</sup>、稲元3号墳<sup>註3</sup>に類似するものである。

B群の石室は、残りが悪く復元が困難である。全て単室の横穴式石室であろう。S05の主体部はS03古墳に付属する、S03に埋葬されない埋葬施設と考えられるが、構造としては横穴式石室として認めてよく、名残高田遺跡などで、同様の構造を知ることができる。

S03・4・6古墳は、西側斜面で南北に一直線に配置がなされており、標高も同一レベルにあることから、同一墓道を共有する、世代を連続する古代家族墓として捉えることができよう。

唯一残りのよいS04は、単室の横穴式石室を持ち、平面形は長方形となるが、右側壁が膨らむ、やや歪んだ形である。玄門部は両袖となるが、袖石間には楣石を認めることができない。使用石材は、全体に小振りで、壁体の持ち送りは腰石上からすぐ始まり、傾斜は強い。

出土遺物について

S01の墳丘および溝出土の遺物は、墳丘上の祭祀に伴うものと考えられる。このように、古墳の2・3区の墳丘ないし溝から土器が出土する例は、久戸8号墳・浦谷C-3・5号墳<sup>註4</sup>などにおいて顕著であり、主体部の外での土器を利用した在り方は、宗像域では5世紀~6世紀中頃の特徴といえる。

遺物の総量はわずかであり、手懸りは少ない。S01出土の須恵器甕は、最大径が体部上半

王丸清勢遺跡

表3 主体部計測表

単位：cm

古墳番号		SO1	SO2	SO3	SO4	SO5	SO6
石室長 (貼石含む)	右	(278)	261				
	左	373					
石室長 (貼石除く)	右	(278)	213		(247)	<71>	
	左	276			(169)		
玄室長	右	235	197		230		
	左	236					
玄室幅	奥	102	100		109	35	
	中央	112	90		120	32	
	前	97					
前庭長	右		48				
	左	94					
袖石間	玄室	53	52				
	前室						
奥壁～第1榑石		239	182				
玄室最大高		140			<115>		

( ) は残存値 < > は推定値

にあり、体底部は尖り気味となる。頸部は短かく外反し、口端部は四面を持つ。口縁下の稜は鋭い。このような特徴は陶邑のTK23号窯遺物註6と類似するが、口縁部の立ち上がり、あるいは体部の文様である楕描き列点文は、楕描きの波状文より後出するものとする、むしろ埼玉稲荷山古墳出土例註7に近いと言える。宗像市域では、久戸8号墳溝出土の甕があるが、本例より稜の鋭さに欠け、後出のものであろう。この種タイプの市域出土甕はほとんど体部文様が楕描き列点文であり、楕描き波状文を有しない。

古墳群の形成について

丘陵稜線上の古墳群であるA群は、SO1出土遺物および主体部構造から、SO2→SO1へと先後関係を捉えることができる。さらにSO2の北側に隣接する古墳が、稜線上のグループの内、最も古く形成されたものと推定できる。SO1の甕が陶邑TK23号窯より、後出のものとするTK47号窯の時期と併行することとなる。このTK47号窯の時期を埼玉稲荷山古墳註8の鉄剣銘にある西暦471年を含むものとする、SO1古墳の築造を大略5世紀の第4四半期の前半頃に置くことができる。SO1に先行するSO2は当然5世紀第3四半期の中での築造が考えられる。

B群の古墳は、年代決定のための資料を持たないが、宗像域での古墳築造は6世紀後半以降

## 正丸清勢遺跡

の古地が丘陵斜面にあること、SO3主体部の構造はSO1主体部とは連続せず、間に2～3世代ほどの期間が設定し得ることから、SO3→SO4→SO6と続く、B群古墳の初現は6世紀後半に置くことができる。

A群からB群へは、古墳の築造が連続しないことから、現段階では別々の古代家族による2単位の群として考えておきたい。しかも、SO1古墳の南方、現在の国道部分に消滅古墳があったとすれば、A・B群の連続性が認められることになる。

本遺跡の被葬者集団の性格については、出土遺物に見るものがなく、現段階では明らかにし得ない。

### 註

1 宗像市富地原梅木11号墳・平等寺向原VI-9号墳などは、畑地造成等により自然地形となっていた区域を、重機による表土除去後に、未盗掘古墳として発見された。

2 宗像市教育委員会 1982 浦谷古墳群I

平天井の石室構造をもつ未盗掘古墳であった。石室内には2体の成人男性と鉄鏃6点が出土している。

3 稲元古墳群調査団 1976 稲元古墳群第1期調査報告

平天井の石室をもつ古墳である。両袖石上に積み石があるが、袖石内側と面が揃っておらず、むしろ袖石上の石積みは側壁が連続するものであろう。須恵器の杯身・高杯・甕・甕が出土している。

4 宗像市教育委員会 1979 久戸古墳群

横穴墓を主体部とする古墳である。土器は墓道と反対側の溝から出土した。他に有蓋高杯、玄室からは耳環が出土した。

5 前掲4

C-3号墳は丘陵稜線の上部を切る溝中(3・4区の境)から出土した。C-5号墳は1～4区の墳裾および溝から各種の土器が散在して出土した。

6 平安学園考古学クラブ 1966 陶邑古窯址群I

7 埼玉県教育委員会 1980 埼玉稲荷山古墳

8 田辺昭三 1981 須恵器大成

白石太一郎 1979 近畿における古墳の年代 考古学ジャーナル 164

白石太一郎 1985 年代決定論(二) 岩波講座 日本考古学 1

王丸清勢遺跡

付編 1 遺跡周辺の植物相について

遺跡周辺の植物相については、宗像市植物友の会事務局長であり、同市の文化財専門委員である梅田政良氏に調査を依頼した。

1990年6月10日に現地調査を実施していただき、次のとおりの成果を得たので、現生の植物相として報告しておきたい。

調査地 福岡県宗像市大字王丸(字清勢) 1043ほか		
地形 許斐山北麓の丘陵稜線および斜面		
海拔 70m	面積 20×20m	出現種類 52

階層	高さ(m)	植被率(%)	優占種	胸径(cm)	種数
I 高木層	16 ~	100	ヒノキ	140	9
II 亜高木層	8 ~	20	カクレミノ	23	11
III 低木層	1.5~	30	タブノキ	5	13
	0.8~	10	ホソバタブ	5	
IV 草本層	~		ナガバジャノヒゲ		14
V コケ層	~				

以下、調査区域ごとの植物を列記する。

高木層	亜高木層	低木層	草本層	つる植物
ヒノキ	カクレミノ	コジイ	ナガバジャノヒゲ	テイカカズラ
コジイ	コジイ	ホソバタブ	ハナミョウガ	ツルウメモドキ
ノグルミ	ヒサカキ	アリドウシ	ヤブラン	サカキカズラ
ヤマザクラ	イヌビワ	アラカシ	ベニシダ	フユイチゴ
タブノキ	シロダモ	タブノキ	ミゾシダ	イタビカズラ
クスノキ	タブノキ	カクレミノ	イノデ	フウトウカズラ
スギ	クロキ	ネズミモチ	オニカナワラビ	サネカズラ
マダケ	ヒメユズリハ	ゴズイ	ツワブキ	ミツバアケビ
ヤマモモ	トベラ	サルトリイバラ	フモトシダ	ツルコウゾ
	ハマビワ	ヤブムラサキ	ツルコウジ	ツタ
	メダケ	ヒメユズリハ	イヌマキ	ツルグミ
		イワガネ	カクレミノ	ヤマノイモ
		イズセンリョウ	ノグルミ	
			サンショウ	

群落名 ヒノキ群落

## 付編2 王丸清勢古墳の石室の石材について

廣 渡 文 利

平成2年6月、王丸清勢古墳の石室の石材の調査を行った。石室に入り肉眼的に鑑定の困難な石材12個を選び、その岩石片を採取した。採取した岩石片について岩石薄片を作製して、顕微鏡観察を行い、構成鉱物の種類と組織から石材の種類と岩質を鑑定した。

なお、いくつかの石材について研磨面の写真を添付した。

### 1. 石材の岩質

鑑定に供した12個の石材は、肉眼的に次の3つのグループに分けられる。

- (A) 灰白色～黄褐色を示す白っぽい岩石
- (B) 暗黒色～青緑色を示す黒っぽい岩石。
- (C) (A) と (B) の中間的な色を示す岩石。

以下、それぞれの石材の肉眼的および顕微鏡による観察結果について説明する。

#### (A) 灰白色～黄灰色を示す白っぽい岩石。

このグループに属するものは、試料番号、S01-1、S01-2、S01-3、S01-6の4個の試料である。

##### ① 半花崗岩 (S01-1)

肉眼では、黄灰色、中粒の岩石で、少量の有色鉱物がみられる。風化作用が著しく、表面より2～3mmの間は、粘土化作用により白色化している。

鏡下では、カリ長石、斜長石、石英からなり、モザイク組織を示す。斜長石は中心部が汚濁しており、絹雲母に変化している。有色鉱物としては、少量の白雲母、榍石、磷灰石、黒色不透明鉱物がみられる。本岩石の研磨面の写真を図版12、S01-1に示す。

##### ② 花崗岩質ベグマタイト (S01-2)

肉眼では、灰白色、粗粒の岩石で、やや淡紅色のカリ長石 (粒径1～2cm)、および灰白色の石英がみられる。

鏡下では、石英、カリ長石、斜長石を主とし、モザイク組織を示す。石英とカリ長石は文象組織 (graphic texture) が顕著にみられ、カリ長石は微斜長石、ペルト長石からなる。有色鉱物としては、少量の黒雲母、磷灰石がみられ、黒雲母は緑泥石に変化している。

##### ③ 文象花崗岩 (S01-3)



## 王丸清勢遺跡

肉眼では、灰色～灰褐色、中粒の岩石で、破断面は灰褐色柱状の長石斑晶(0.8~1.0cm)がみられる。前述のSO1-2に類似するが、やや細粒である。

鏡下では、石英、カリ長石、斜長石がモザイク組織を示すが、時には石英、カリ長石が文象組織を示す。カリ長石は微斜長石、ペルト長石からなる。有色鉱物としては、少量の黒雲母、白雲母、黒色不透明鉱物がみられる。

### ④ 文象花崗岩(SO1-6)

肉眼では、灰色～黄灰色、中粒の岩石で、径0.2~0.5cmの長石がみられる。前述のSO1-2、SO1-3に類似するが、やや細粒である。

鏡下では、石英、カリ長石、斜長石からなり、モザイク組織を示す。また、石英、カリ長石は文象組織を示す。有色鉱物としては、少量の黒雲母、角閃石がみられるが、有色鉱物の量は、SO1-2、SO1-3に比べて著しく少ない。

研磨片の写真を図版12、SO1-6に示す。

### (B) 暗黒色～青緑色を示す黒っぽい岩石

本グループに属する試料は、SO1-8、SO1-9、SO1-10、SO2-1、SO2-2の5試料である。

### ⑤ 塩基性凝灰岩のホルンフェルス(SO1-8)

肉眼では、暗緑色～黒色、細粒緻密な岩石で、往々にして0.2~1cm前後の花崗岩質岩脈によって貫かれている。

鏡下では、有色鉱物としては径0.02~0.15mmの普通角閃石からなり、不規則粒状であるが、時には長柱状のものもある。部分的には黒雲母に変化しており、少量の榊石、黒色不透明鉱物を伴う。基底は石英、斜長石からなり、斜長石は汚濁しており、絹雲母に変化している。

以上の観察から、本岩石の源岩は塩基性凝灰岩で、花崗岩類による熱変成作用を受け、ホルンフェルスになったものと判断される。本岩石の研磨面の写真を図版12、SO1-8に示す。

### ⑥ 塩基性凝灰岩のホルンフェルス(SO2-1)

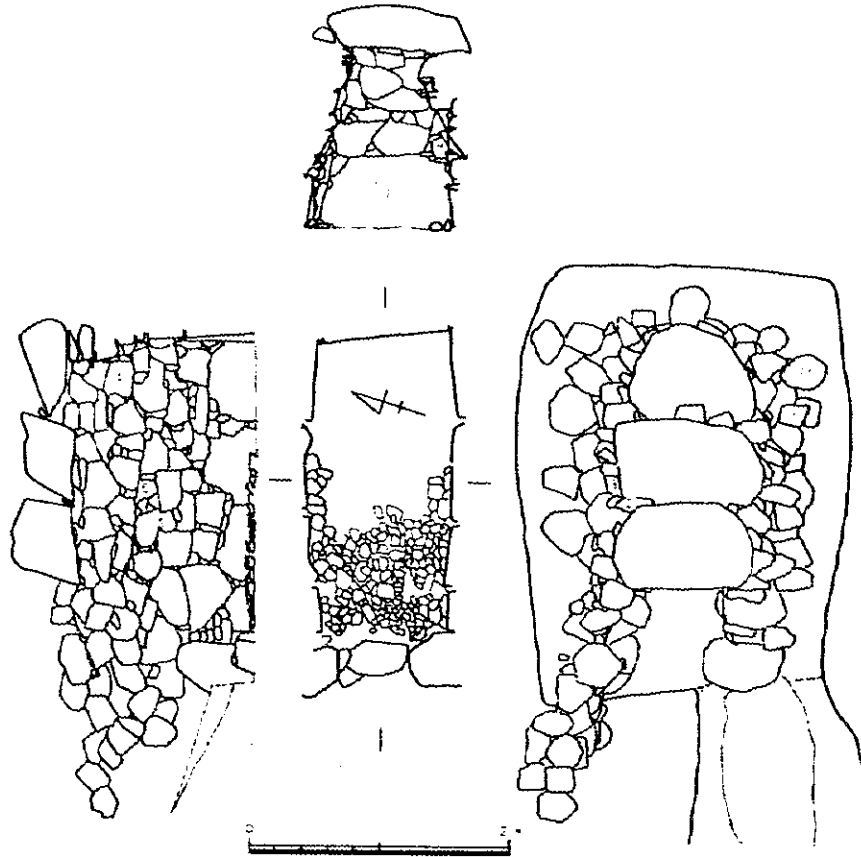
肉眼では、青緑色、細～中粒、緻密堅硬な岩石である。

鏡下では、径0.2~0.5mmの角閃石、黒雲母からなり、基底は斜長石、石英、カリ長石からなる。斜長石は汚濁して絹雲母に変わっている。本岩石は、前述のSO1-8に類似するがやや粗粒である。

### ⑦ 角閃玢岩(SO2-2)

肉眼では、暗緑色～青緑色、中粒の岩石で、粗粒の長石の斑晶がみられる。

鏡下では、主成分鉱物として斜長石、石英、カリ長石、角閃石、黒雲母からなる。斜長石は、径0.6~1.8mm前後の斑晶を示し、大部分は絹雲母化している。また、角閃石、黒雲母の一部は



第26図 SO1主体部の石材サンプル図 (1/60)

緑泥石に変化している。

⑧ 角閃玢岩のホルンフェルス (SO1-9)

肉眼では、青緑色、中粒の岩石で、幅2~3cmの花崗岩質の細脈がみられる。

鏡下では、有色鉱物としては角閃石、黒雲母を主とするが、時には径0.2~0.5mmの自形~半自形の柱状結晶を示す。また、時には長径1.8~2.0mmの斑状変晶がみられ、細粒の角閃石、黒雲母、磁鉄鉱の集まりになっている。

以上の観察から、本岩石の源岩は角閃玢岩で、花崗岩類の熱変成作用を受け、ホルンフェルスになったものと判断される。

⑨ 微花崗閃緑岩 (SO1-10)

肉眼では、暗緑色、細粒、堅硬な岩石である。鏡下では、主成分鉱物として斜長石、カリ長石、石英、角閃石からなる。粒径は0.5~1.0mm程度でモザイク組織を示す。角閃石は時には

## E丸清勢遺跡

2mm前後の自形～半自形の柱状結晶を示し、一部は緑泥石に変化している。また、斜長石は中心部が汚濁しており、絹雲母化作用が著しい。本岩石の研磨面の写真を、図版12、SO1-10に示す。

### (C) (A) と (B) の中間的な色を示す岩石

このグループに属するものは、試料番号SO1-4、SO1-5、SO1-7の3個の試料である。

#### ⑩ 黒雲母花崗岩 (SO1-4)

肉眼では、優白質、粗粒な岩石で、黒色六角板状の黒雲母の結晶がみられる。

鏡下では、石英、カリ長石、斜長石、黒雲母、角閃石がモザイク組織を示す。少量の楕石、ジルコン、燐灰石、黒色不透明鉱物がみられる。

#### ⑪ 黒雲母角閃石花崗閃緑岩 (SO1-5)

肉眼では、や、優黒色、中粒の岩石で、灰白色中粒の石英、長石、および黒色中粒の黒雲母、角閃石が識別される。

鏡下では、石英、カリ長石、斜長石、黒雲母、角閃石を主成分として、少量の楕石、燐灰石、緑れん石、黒色不透明鉱物を伴う。黒雲母は一部緑泥石に、斜長石は絹雲母、カオリン鉱物に変化している。本岩石の研磨面の写真を図版12、SO1-5に示す。

#### ⑫ 黒雲母角閃石花崗閃緑岩 (SO1-7)

肉眼では、や、優白質、中～細粒の岩石で、SO1-4より白っぽい。粗粒の角閃石、黒雲母が識別される。

鏡下では、石英、カリ長石、斜長石、黒雲母、角閃石を主とし、少量の楕石、燐灰石、金紅石、方解石、黒色不透明鉱物がみられる角閃石は炭酸塩化作用をうけ方解石に、また一部は緑泥石に変化している。本岩石の研磨片の写真を図版12、SO1-7に示す。

## 2. 石材の岩石名について

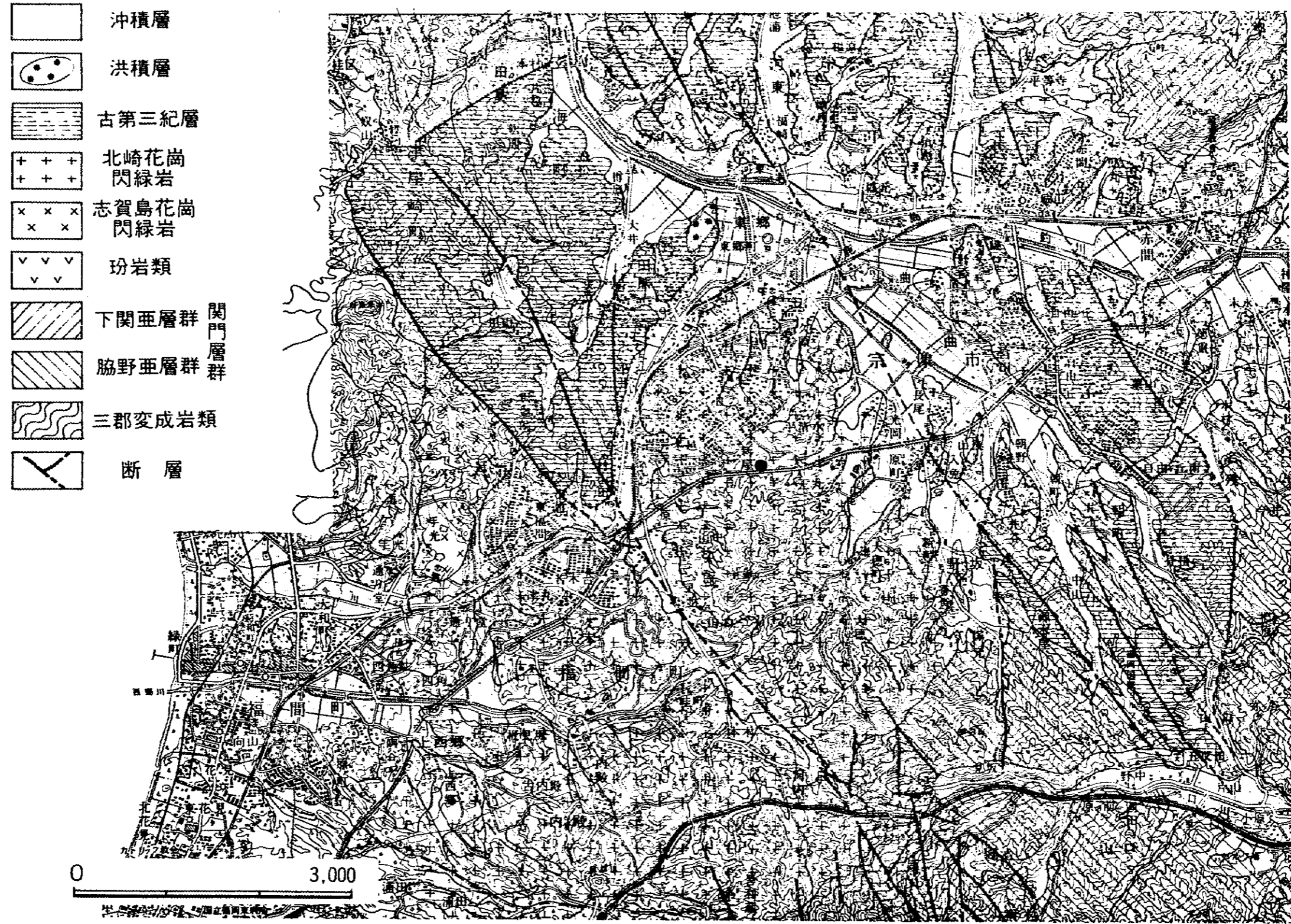
以上で、古墳の石室の石材の岩石学的性質について説明したが、これらの結果を要約すれば、次のとおりである。

### (A) 灰白色～黄灰色を示す白っぽい岩石

このグループに属する石材の岩石名は、

- ① 半花崗岩 (SO1-1)
- ② 花崗岩質ペグマタイト (SO1-2)
- ③ 文象花崗岩 (SO1-3)

王丸清勢遺跡



第27図 宗像市王丸周辺の地質図 (1971. 松下による) (1/50,000)

④ 文象花崗岩 (S01-4)

(B) 暗黒色～青緑色の黒っぽい岩石

このグループに属する石材の岩石名は

⑤ 塩基性凝灰岩のホルンフェルス (S01-8)

⑥ 同上 (S02-1)

⑦ 角閃玢岩 (S02-2)

⑧ 角閃玢岩のホルンフェルス (S01-7)

⑨ 微花崗閃緑岩 (S01-10)

(C) (A)、(B) の中間的な色を示す岩石、

このグループに属する石材の岩石名は、

⑩ 黒雲母花崗閃緑岩 (S01-4)

⑪ 黒雲母角閃石花崗閃緑岩 (S01-5)

⑫ 同上 (S01-7)

すなわち、①、②、③、④、⑦、⑨、⑩、⑪、⑫は、いずれも火成岩であり、⑤、⑥、⑧は  
変成岩である。

### 3. 石材の産地

本古墳に用いられた石材の産地を推定するためには、古墳周辺の地質調査を行い、石材の産地を確認すべきであるが、今回は行っていないので、既存の地質図を参考にして推定を試みることにする。

第28図に、古墳周辺の地質図を掲げる。本地域で最も古い岩層は、古生層、変成岩類からなる地層で、本地域の南部に小範囲に分布するにすぎない。ついで、白亜系の関門層群が北東部から南部に分布する。この時期に火成岩の岩脈として玢岩・玢岩類が、宗像市河東付近に分布している。

さらに白亜系後期になって、花崗岩・花崗閃緑岩類の火成岩類が広範囲に進入し、既存の関門層群や玢岩類に熱変成作用を与えている。その後、第三紀に入り、沈降、断層運動を伴いながら、宗像層群、直方層群からなる古第三系の地層が堆積し、一部には宗像炭田の夾炭層を形成した。

王丸清勢古墳は、白亜系に貫入した花崗岩・花崗閃緑岩類の分布する地域に作られたものである。すなわち、古墳に用いられた石材のうち、①半花崗岩、②花崗岩質ペグマタイト、③、④文象花崗岩類は、いずれも花崗岩・花崗閃緑岩類に伴う岩脈で、⑦微花崗閃緑岩、⑩黒雲母花崗閃緑岩、⑪、⑫黒雲母角閃石花崗閃緑岩とともに、本地域における主要火成岩を構成する

### 王丸清勢遺跡

岩石で、王丸周辺からもたらされたものと推定される。

また、⑨角閃玢岩、および⑥角閃玢岩のホルンフェルスは、王丸北方の河東地域に分布する玢岩を用いたもので、前者は花崗岩類の熱変成作用をまぬかれた地域のもので、後者は熱変成作用を受けた地域のものであろう。

さらに、⑤、⑧の塩基性凝灰岩のホルンフェルスは、関門層群の一員である塩基性～中性の凝灰岩が花崗岩類の変成作用によって変成岩の1種であるホルンフェルスになったものであろう。

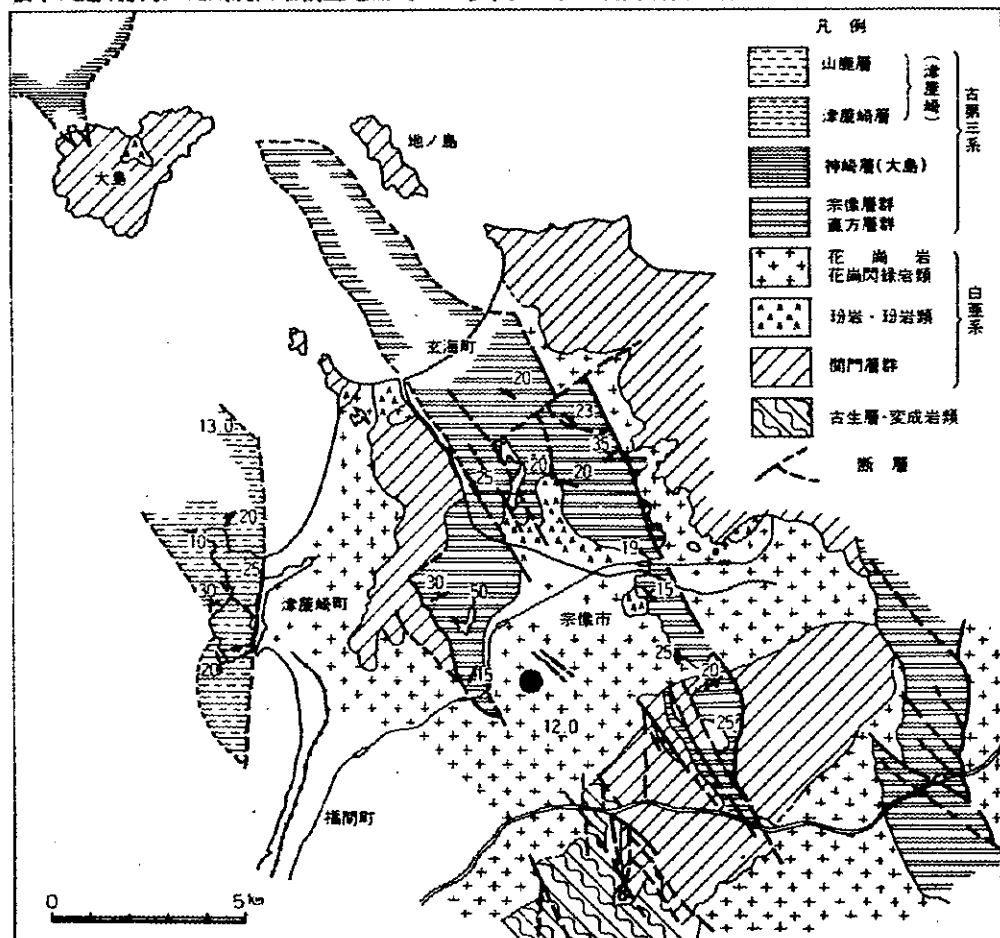
以上のように、王丸清勢古墳の石材の産地は、古墳から5km以内の地域から集めることが可能と考えられる。

#### 引用文献

富田幸臣・石橋毅(1990):北部九州炭田古第三系の地質と化石(概説)、九大理研報、16-(2)99~142

唐木田芳文(1985):北九州花崗岩の地質学的分類、日本応用地質学会九州支部会報、第6号、2-12

松下久道(1971):九州炭田堆積盆地生成の一考察、九大理研報、11、1~16



第28図 宗像市周辺の地質図  
(1990.富田・石橋による)

# 版 图

王丸清勢遺跡

図版 1



遺跡周辺の航空写真 (1/12,500) 昭和53年6月撮影





調査前全景  
(西から)



調査後全景(西から)

上丸清勢遺跡

図版 3



SO1 調査前(北から)



SO1 調査後全景(西から)

図版4



SO1 主体部玄門部



SO1 主体部前庭左側石積み



SO1 主体部奥壁

王丸清勢遺跡

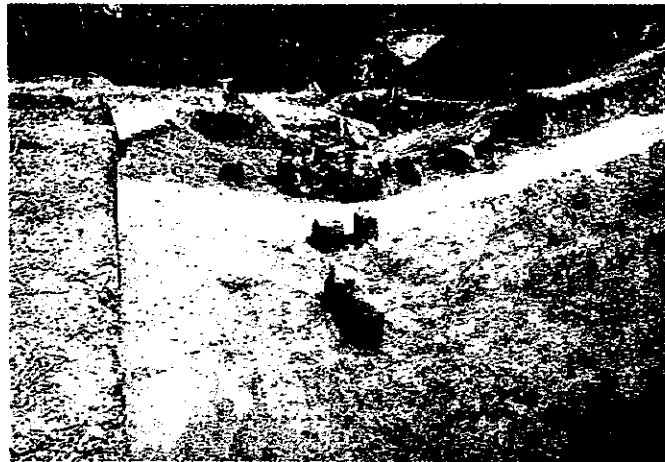
図版5



SO1 玄門部閉塞状況



SO1の1・2区遺物出土状況(北から)



SO1の1・2区遺物出土状況(西から)

E丸清勢遺跡

図版6



SO<sub>2</sub>調査前(南から)



SO<sub>2</sub>調査後全景(西から)

丸清勢遺跡

図版 7



SO2 主体部(西から)



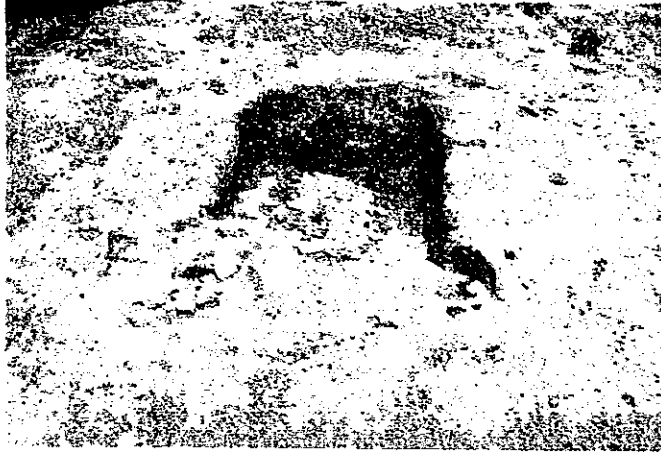
SO2 主体部(東から)



SO2 主体部遺物出土状況

上丸清勢遺跡

図版8



S03 主体部(西から)



S03のAトレンチ西壁



S03のBトレンチ南壁



SO4 主体部(西から)



SO4 主体部奥壁

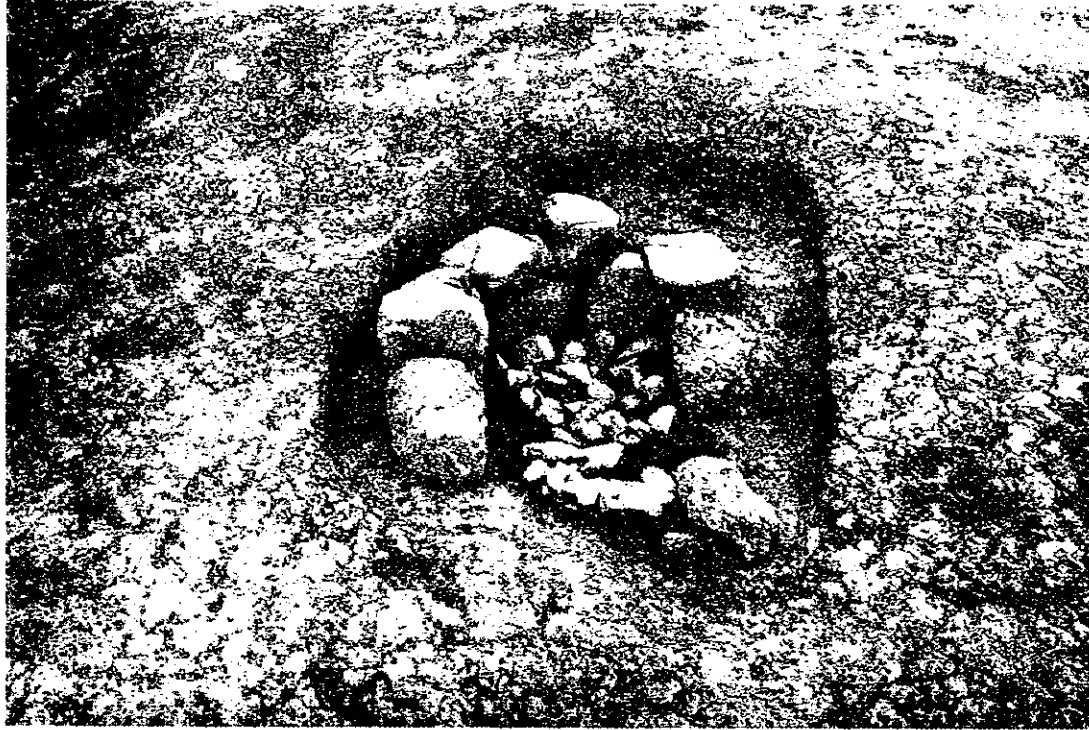


SO4 主体部左側壁



王丸清勢遺跡

図版10



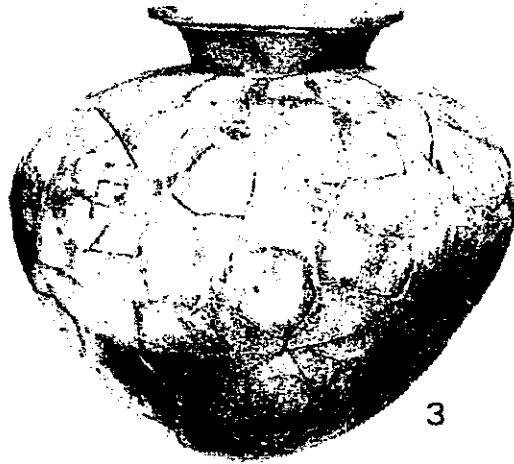
SO5 主体部(西から)



SO6 主体部(西から)



1



3



4



5



6



7



9



10



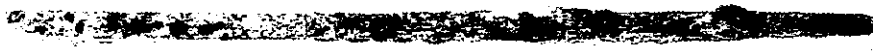
11



12



13



8

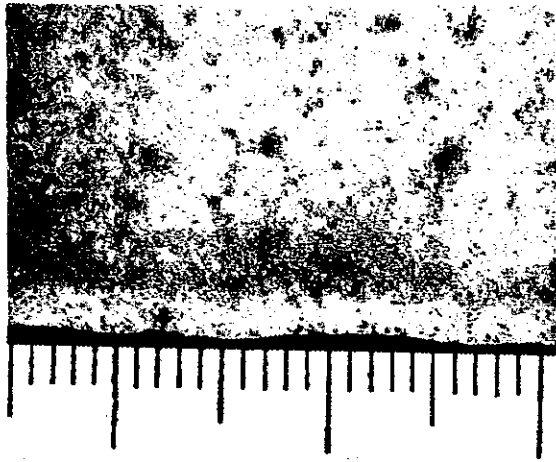


14

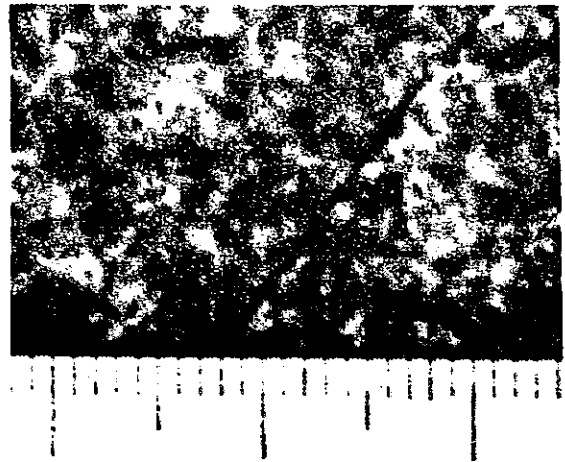


15

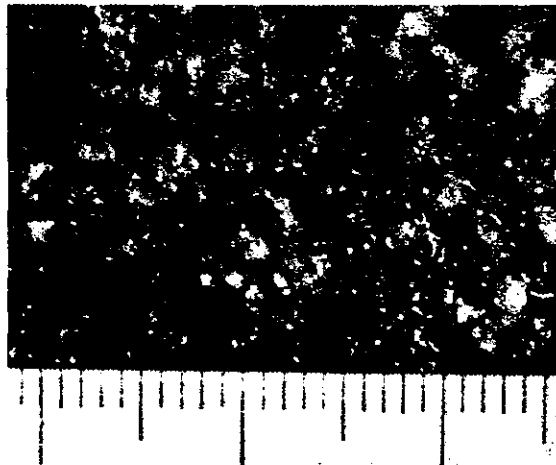
出土遺物



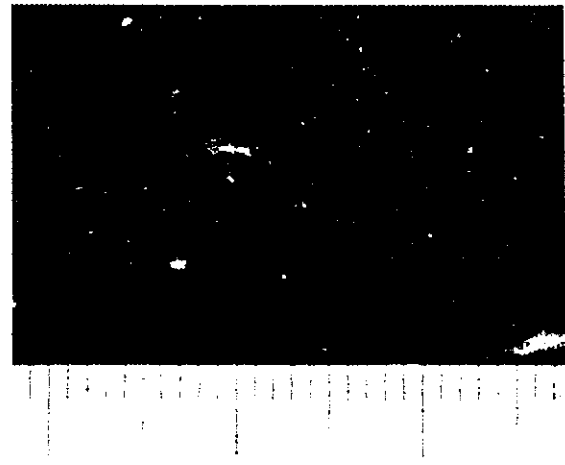
SO1-1



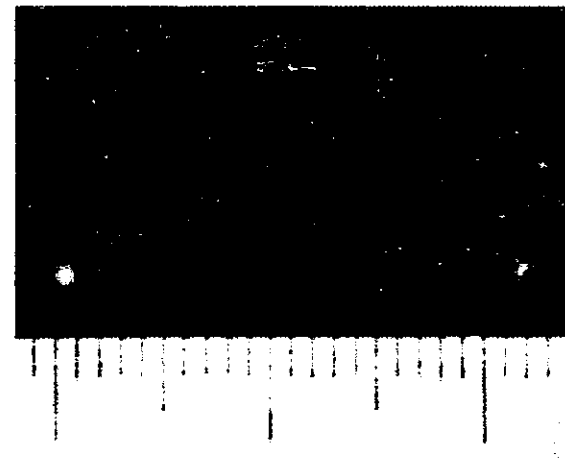
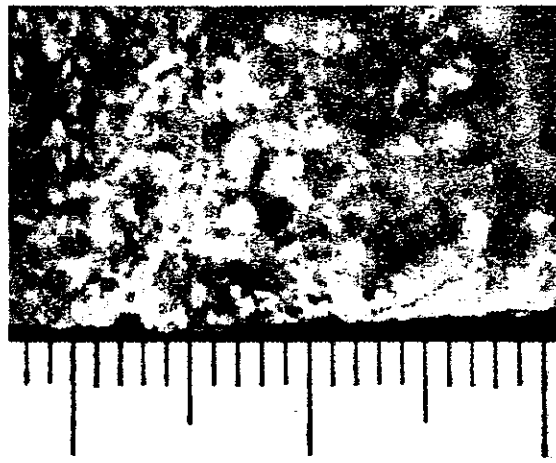
SO1-7



SO1-5



SO1-8



SO1-10

SO1 主体部石材のサンプル

## 王丸清勢

— 福岡県宗像市王丸所在遺跡の発掘調査報告 —

宗像市文化財調査報告書 第33集

平成3年3月31日

発行 宗像市教育委員会

福岡県宗像市大字東郷995番地

印刷 大成印刷株式会社

福岡市博多区東那珂3丁目6-62